

令和 4 年度
教職課程自己点検・評価報告書

武蔵野美術大学 造形学部

はじめに

本学は帝国美術学校として 1929 年に創設され、1931 年に師範科が設置されてから実に 90 年以上もの間、「教養ある美術家の養成」「真に人間的自由に達する美術教育への願い」を掲げ、優秀な美術科教員の養成に力を注いできました。教員養成の長い歴史の中で美術教育の知見を蓄積し、教員として多くの卒業生を送り出すことにとどまらず、教員として活躍する卒業生の皆様を通じて本学の教職課程もまた高く評価されていると自負しております。

現在は造形学部日本画学科、油絵学科油絵専攻、油絵学科版画専攻、彫刻学科、視覚伝達デザイン学科、工芸工業デザイン学科、空間演出デザイン学科、芸術文化学科及び通信教育課程（油絵学科、芸術文化学科）が中学校一種免許状（美術）、高等学校一種免許状（美術）（工芸）の課程認定を受けており、美術系・デザイン系を問わず工芸免許を取得できるカリキュラムを展開していることは、本学が時代によって変化する教職課程への要請に応えてことの現れであり、本学の特色の一つ、大きな強みであるといえます。

これまでも教職課程研究室において「武蔵野美術大学教職課程の概要」を毎年編纂し公開しておりますが、この度、教職課程自己点検評価報告の義務化に伴い、課程認定を受ける当事者たる各学科横断的な自己点検評価報告を実施いたしました。これをさらなる教育の質向上、内部質保証の強化を目指す研鑽の機会と位置付けて各学科の取り組みを一層磨いてまいります。

令和 4 年 12 月

武蔵野美術大学 造形学部長 樺山祐和

日本画学科

教職課程科目にかかわる専任教員数 4名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 9名

1-1 日本画学科における教職課程教育の目的・目標の共有

日本画学科では、現在、教職課程専門委員会委員を岩田壮平教授が担当している。教職課程専門委員会での議論や配布資料は、研究室会議で岩田教授より報告され、情報の共有を行っている。また、教職の教科に関わる科目を担当する教員は、毎年更新される『教職課程ガイドブック』を年度当初に確認し、変更点などを押さえつつ、適切な授業運営に努めている。学科内の教職履修者については、少なくとも助教および専任教員は把握しており、当該学生における当学科課題授業などは、掛かる授業内容に工夫を加え、介護等体験実習や教育実習の際には、そうした実習に学生が集中できるよう配慮に努めている。

ここ10年の日本画学科の教職課程履修者(入学年度の教職登録者)は、平成25年度58人、平成26年度56人、平成27年度50人、平成28年度41人、平成29年度43人、平成30年度47人(院生を含む)、令和元年度41人(院生を含む)、令和2年度35人(院生を含む)、令和3年度37人(院生を含む)、令和4年度37人(院生を含む)となっている。

毎年多くの教職履修者があり、それぞれに意欲のある学生である。皆、将来に向け優れた教職者へとなるべく邁進している。

1-2 日本画学科の長所・特色

日本画学科では、日本の歴史の中、古来より育まれて来た国画である日本画。東アジア全域にわたる東洋画という広域の枠のなか、その伝統文化を受け継ぎつつも独自の精神性と美意識を深く追求し、絵画という虚実の世界を往復しつつ自らを発見していく。日本画に因む様々な材料やその技術は世界の中でも特質を極めており、それらを扱う過程を大切に行うことにより伝統からの革新を常に試みる力を育くむ。そして、同時代性の認識を持ち更なる社会へと自らの造形制作を通して発信し続ける表現者の育成を教育目標としている。本学科では、日本画学科で培われた精神性とその技術力を活かし、教育の世界へおいても充実した教育を行えるよう教員養成を行っている。

1-3 日本画学科における取組上の課題

教職課程専門委員会での議論など、研究室会議を通して助教および専任教員の間では共有されているが、非常勤講師等には十分に共有されていないのが現状である。非常勤講師等も含めた学科全体での教職に関する情報共有を今後更に充実させる必要がある。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

- ①武蔵野美術大学入学センター『武蔵野美術大学 大学案内 2022』武蔵野美術大学、2021年、16頁 https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=7523600-0-1&FL=0
- ②岩田壮平監修『武蔵野美術大学日本画学科 学科紹介 2021』<https://nihonga.musabi.ac.jp/webpanf-2021>、間島秀徳監修『武蔵野美術大学日本画学科 学科紹介 2022』https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=7523600-0-16&FL=0

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（日本画学科の現状説明）

入学直後の学科のオリエンテーションの際をはじめ折々に「中学校教諭一種（美術）」「高等学校教諭一種（美術）（工芸）」の教員免許を取得できることを伝えるなど教職についても取り上げ、日本画学科が文部科学省より正式に教職の認定を受けた学科であることを説明している。ただし、教職を履修した場合、取得しなければならない単位数が相当増えるため、安易に教職課程に登録するのではなく、よく考えてから判断するよう、各々の履修計画の大切さも伝えるようにしている。

2-2 日本画学科の長所・特色

あらゆる絵画を生み出す源とも言えるドローイングを大切に考える中で、日本画学科では人体デッサンを重視している。人のかたちを「見て描く」事を繰り返すことにより、自然の造形物である人体の本質を理解し、自身の造形表現へと繋げて行く。これはただ人の外形にのみ囚われるのではなく内面にまで踏み込んで描くことを体感することで、人の心の理解に努める優れた教育者を育むこととなる。そして更なるその先の人間形成を構築するための教育へと繋がると信じている。

また、日本の豊潤な風土や歴史により育まれてきた独自の技法や材料。学生は古典技法を学び、描かれた時代背景とその技法、主題の研究を通して、現代における自己の表現とは何かを模索することで我々のルーツを学び、未来においての自らが為すべき夢の構築を共に考えて行ける教育者の育成に繋がると信じている。

2-3 日本画学科における取組上の課題

従来の授業の中でも既に行なってはいるが、学生の実作を通してディスカッションを行い、更に教員や学生間でのコミュニケーションを密に図ることで、教育者育成に繋がる人材の育成へ向けてより一層の拡充を試みたいところである。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

- 岩田壮平監修『武蔵野美術大学日本画学科 学科紹介 2021』<https://nihonga.musabi.ac.jp/webpanf-2021>、間島秀徳監修『武蔵野美術大学日本画学科

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

教務チームおよび教職課程研究室と確認をしながら、必要な科目を設置している。また、順次性を踏まえた学年配当をしており、基礎から応用へと無理なく学習できるようにしている。必要な事項が確実に実施されるよう、専任教員をはじめ助教、非常勤講師の間で相互に入念な確認をし、シラバスの点検を毎年行っている。

各科目は、その分野の経験豊富な専門家を充て、充実した内容となるよう努めている。

教科に関する科目と担当者は次の通り。

○1年

日本画基礎Ⅰ：間島秀徳、中村ケンゴ、泉桐子

日本画基礎Ⅱ：間島秀徳、岩田壮平、武田裕子、竹原美也子

日本画基礎Ⅲ：尾長良範、泉桐子

絵画基礎Ⅰ：尾長良範、泉桐子

デザイン基礎（映像メディア表現を含む）：岩田壮平、伊藤真一、青沼優介、情報教育センター

○2年

日本画基礎Ⅳ：岩田壮平、泉桐子、竹原美也子

日本画基礎Ⅶ：岩田壮平、浅見貴子

絵画基礎Ⅱ：岩田壮平、武田裕子

絵画基礎Ⅲ：間島秀徳、橋本晶子

造形総合・彫刻Ⅰ：戸田 裕介、山本一弥、長谷川さち、多和圭三、高野正晃、櫻井かえで、川崎広平、岡田健太郎、諸貫きよ恵、正親優哉、杉内あやの

デザインⅡ：尾長良範、吉賀あさみ

工芸制作Ⅰ：工芸工業デザイン学科、大村俊二、西川聡、神藤修、宗像重幸、竹田精一郎、近岡令、丸岡勇太、井尾鉦一

○3年

絵画実習Ⅱ：尾長良範・浅見貴子・泉桐子・中村ケンゴ・吉賀あさみ

絵画実習Ⅲ：尾長良範・間島秀徳・谷保玲奈・浅見貴子

絵画実習Ⅳ：尾長良範・間島秀徳・泉桐子・中村ケンゴ・小金沢智・竹原美也子

絵画実習Ⅴ：尾長良範・間島秀徳・谷保玲奈・吉賀あさみ・橋本晶子

絵画実習Ⅵ：間島秀徳・岩田壮平・浅見貴子・小金沢智・竹原美也子・中村ケンゴ・谷保玲奈

工芸制作Ⅱ：尾長良範、岩田壮平、武田裕子、橋本晶子

○4 年

絵画実習 VII：尾長良範・間島秀徳・岩田壮平

絵画実習 VIII：尾長良範・間島秀徳・岩田壮平

3-2 日本画学科の長所・特色

日本画学科での教育の特筆は、美術の教科書等に作品紹介されることのある教員が、実際に自らの作品制作やそのプロセスを基にして、東洋独自の文化を背景に育まれた日本画から、現代における多様な価値観を学ぶことで、自ずから思考・創造する表現者の育成を目指している。

1・2 年次ではさまざまな課題に取り組んでおり、主に基礎的な日本画表現、古典技法や材料、デッサン、造形力を学び、自由な表現へ向かうための基礎力を養うことにある。

3・4 年次では、各自の表現を展開する力を養い、自主制作を中心とすることで主体性を重んじたカリキュラムに取り組むことを目指している。そこでは学生との対話を重視することで、将来的に教育者となる者に備える、より密度の高い内容となっている。

3-3 日本画学科における取組上の課題

日本画を含む美術を創造する上で、デザインというカテゴリーが存在する理由から、デザイン基礎以外のデザインⅡでは、日本画学科教員のみとなっている。しかし、より対応力のある教員育成のためには、デザインに由来する該当学科教員の授業への関わりを検討しても良いのではと考える。これは、工芸制作Ⅱにも同様のことが言え、それは日本画制作において、そのプロセスに工芸的手法が含まれるがゆえではあるが、ここでも工芸デザインを専門とする学科教員とのセッションを試みても良いのではと考えている。このように、他学科との一層の多様なつながりを持ち、更なる授業の拡充を試みることで、日本画学科として本学の教職課程運営に関わることができればと望む。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

①『教職課程ガイドブック（2022 年度入学生用）』武蔵野美術大学学生支援グループ教務チーム、2022 年、16-37 頁

②シラバス 2022 版、38-47 頁

③ 武蔵野美術大学ホームページ 日本画学科カリキュラム概要
<https://www.musabi.ac.jp/course/undergraduate/jp/curriculum/>

④間島秀徳、岩田壮平監修『武蔵野美術大学日本画学科 学科紹介 2022』
https://edu.career-tasu.jp/p/digital_pamph/frame.aspx?id=7523600-0-16&FL=0

4 上記 1 から 3 の項目における日本画学科の自己点検・評価を踏まえた総合評価

教員養成の動向や学内での教職に関わる共有事項については、教職課程専門委員会委員を

通じて、助教や専任教員の間では共有できている。ただし、非常勤講師を含む学科全体で共有ということを考えると不十分なところがある。また、学習指導要領や教職課程コアカリキュラムについての知識を深める機会を設ける必要がある。

本学科の教育は、Society 5.0 や GIGA スクールといった政府の構想とこれらを踏まえた教員養成上の要求にも十分に応えるものになっている。ただし、こうした長所が意識的に整理され、展開されているわけではない。こうした点が意識的に整理されていくと、より充実した時代に即した教員養成ができると思われる。

また、日本画学科では教員が一丸となり、日本人の感性に宿る独特な美意識と精神性から生まれる日本独自の文化を背景に保持してきた伝統を現代の表現として展開し、個性豊かに創造する力を持つ人材の育成を教育目標とし積極的に授業を行ってきたが、更に幅広い力を拡充する教育者を育むため、教職課程研究室をはじめ、さまざまな学科研究室との連携強化を図って行きたいところである。

油絵学科油絵専攻

教職課程科目にかかわる専任教員数 12 名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 21 名

1-1 油絵学科油絵専攻における教職課程教育の目的・目標の共有

油絵学科油絵専攻では、研究室に『教職課程ガイドブック』を常備し、教職課程に該当する科目を担当する教員の要望に応じ、随時教育内容を確認できる体制を整えている。また、教職課程専門委員会での会議の概要や配布資料については、専任教員への会議報告のメールや、研究室会議などで情報と意識の共有をしている。

教職課程履修者に対し、科目担当教員や助教が特別な指導を行う機会を設けてはいない。しかし履修者から何らかのアドバイスを求められれば、内容に応じた指導を適宜行っている。油絵専攻における教職課程履修者の推移について説明する。取得が可能な教員免許状は、中学校教諭1種（美術）、高等学校教諭1種（美術）（工芸）であり、ほとんどの教職課程履修者が意欲的に取り組んでいる。しかしながら4年次までモチベーションを維持して教育実習に至る道は険しく、年によっても変動が見られる。たとえば令和元年度の履修生32人のうち、最終学年で教育実習に至った人数は13人であった。

また、教職課程履修の最終学年生および科目等履修生が教育実習を経験するにあたり、実習校により、その期間中に大学から教員の派遣を依頼される場合がある。例年、専任教員が手分けして実習校を訪問しているが、本年度もすでに東京都立国分寺高等学校、船橋市立船橋中学校、神奈川県立金程中学校に研究室として教員を派遣している。

指導教員として受け入れ校の校長・教頭・教務主任・実習担当教員・美術担当教員などに面会し、多くの場合は履修生による研究授業ならびに実習校教員による講義を参観する。それは実習先から大学や学生本人への要望の聴取できる重要な機会である。以上の取り組みを通して受け入れ校との関係を強化、維持している。

1-2 油絵学科油絵専攻の長所・特色

油絵学科油絵専攻は、絵画を発想の起点として、そこから派生する分野にも表現の可能性をみている。絵を描く人はもちろんのこと、インスタレーションや身体表現、映像などのジャンルにとらわれない制作を奨励している。その特徴は「多様性」という言葉に象徴され、私たちはその寛容さを最も大切にしていきたいと考えている。

1-3 油絵学科油絵専攻における取組上の課題

油絵専攻では実態として、教職課程専門委員会でおこなわれた議論の要点などについて、専任教員間で常に共有をはかっている。教職課程履修者が誰なのかについては、研究室の履修者名簿などで確認することはできるが、教員は教育実習に伴う公欠が発生することで初めて認識するような実態がある。また、教科に関する科目を担当する非常勤講師への情報共有は

随時の対応となっている。しかしながら、油絵専攻では年に二度、全ての教員が一堂に会し意見交換をするカリキュラム会議が独自に設定されており、その際に実態の確認と議論が可能である。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

『武蔵野美術大学 大学案内 2022』武蔵野美術大学、2022 年度入学生用 P22~27/ P92~93
『教職課程ガイドブック』武蔵野美術大学、2022 年度入学生用 P18~19
『履修・学修ガイドブック』武蔵野美術大学 造形学部、2022 年 P48~81

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（油絵学科油絵専攻の現状説明）

油絵専攻では、入学後の新入生ガイダンスにおいて、キャリア形成の選択肢の一つとして、中学校 1 種（美術）、高等学校 1 種（美術）、高等学校 1 種（工芸）の教員免許状の取得が可能なこと、そして履修をした場合に通常の学生よりも取得すべき単位数が多くなり、強い向学の意志をもって履修登録をするべきであることを伝えている。さらにはその社会的意義を訴え、積極的な検討を呼びかけている。情報として学生自身も『教職課程ガイドブック』を事務局に請求することが可能であることを示し、教職履修の意欲向上につなげている。また、受験生向けの入学相談会や高校訪問、あるいはオープンキャンパスで、教職課程を履修するための情報とその意義を伝えている。それは保護者が教員資格取得を美大受験について許可を与える条件にするようなケースがあり、その要望に応えるためでもある。なお、ここ 4 年間の油絵学科の教職課程履修登録者は、令和元年度 32 人、令和 2 年度 40 人、令和 3 年度 25 人、令和 4 年度 40 人である。

2-2 油絵学科油絵専攻の長所・特色

油絵学科の授業は作家養成としての性格が強いものと見做されがちであるが、一定の業界への即戦力を輩出するべく特化した技術教育を、専門学校的に施すのではなく、大学の本分として、造形を通して哲学的な問いに至るような、普遍的内容を含む授業構成を志向している。それは履修生にとって一過性ではない強固な専門家としての基盤を築くことが肝要と考えているからである。

一方で、生涯教育としての側面も無視できない。アートを人類の文化の顕現として知的に理解し探求する対象としてとらえ、主体的に調査し考察を加えた成果を、広く共有することを目指し表現する方法を学ぶことは、将来教育者を目指す者にとっても有益な経験であろう。学生たちそれぞれが、アートのマインドと創作の力を活かして社会に貢献し、広い意味での「表現者」となることを期待するものである。

2-3 油絵学科油絵専攻における取組上の課題

専攻内の教職課程履修者について、現況として特別な指導を行っていないが、そこに問題が

ないのか再検討が望まれる。また、教科及び教科の指導法に関する科目として、学科別科目（造形専門科目）が含まれているが、学生も教員もそれが教職課程の科目でもあるということについて意識に上らない実態がある。これまでの課題内容は専門性が高く、基礎的な教養が求められる教職履修者が学ぶべき内容が、特に考慮されてこなかったため、それをいかに講義内容に適度に織り込んでいくかがこれからの課題であろう。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

『武蔵野美術大学 大学案内 2022』武蔵野美術大学、2022 年度入学生用 P22~27/ P92~93

『教職課程ガイドブック』武蔵野美術大学、2022 年度入学生用 P18~19

『履修・学修ガイドブック』武蔵野美術大学 造形学部、2022 年 P48~81

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

油絵学科油絵専攻は、教職課程研究室と連携して、必要な科目を設置している。教科に関する科目は、造形総合科目（造形専門科目）では教職課程履修者を念頭に置き、基礎的な指導が行われている。また、教科及び教科の指導法に関する科目として、専門性の高い学科別科目（造形専門科目）授業科目群の中から編成されており、段階的に学習の深まりへと導くように編成している。また、工芸制作Ⅱとして絵画の職人的な技能を絵画組成室で伝えている。各科目の目的・目標を確実に達成できているか、毎年、シラバスや学習指導の点検と更新を行っている。

絵画基礎Ⅰ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、諏訪敦、丸山直文）

絵画基礎Ⅱ（樺山祐和、赤塚祐二、諏訪敦、）

絵画基礎Ⅲ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、諏訪敦、丸山直文）

絵画基礎Ⅳ（水上泰財、小林耕平）

絵画基礎Ⅴ（樺山祐和、小林耕平、丸山直文）

絵画基礎Ⅶ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、諏訪敦、小林耕平、小林孝亘）

絵画実習Ⅰ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、丸山直文、小林耕平、小林孝亘）

絵画実習Ⅱ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、丸山直文、小林耕平、小林孝亘）

絵画実習Ⅲ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、丸山直文、小林耕平、小林孝亘）

絵画実習Ⅳ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、丸山直文、小林耕平、小林孝亘）

絵画実習Ⅴ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、小林耕平、小林孝亘）

絵画実習Ⅵ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、丸山直文、小林耕平、小林孝亘）

絵画実習Ⅶ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、小林孝亘）

絵画実習Ⅷ（樺山祐和、袴田京太郎、赤塚祐二、水上泰財、丸山直文、小林耕平、小林孝亘）

造形総合・彫刻Ⅰ（袴田京太郎）

デザイン基礎（映像メディア表現を含む）（樺山祐和）

平面色彩構成（袴田京太郎、小林孝亘）

工芸制作Ⅱ（小尾修）

3-2 油絵学科油絵専攻の長所・特色

1～2 年次の基礎教育の期間において、幅広い現代の表現を選択的に学び、造形の経験値を増やしていく。それに加えて、特に 15～17 世紀にみられる西洋画の古典技法までも、油絵学科が管理する絵画組成室を拠点として教授しているのは、伝統的技術から現代の表現までを、歴史的な背景を確かな教養として幅広く身につけながら、これまでのジャンルにとらわれない、新たな可能性を視野に入れた表現を目指しているからである。この古典と現代を往復するような、実習を基盤とした教育の手厚さは特筆するべきものであろう。

3-3 油絵学科油絵専攻における取組上の課題

教科に関する科目は、各担当教員によって実践的でバラエティーに富んだ内容の授業が提供しており、それ自体は特に改善を要するものではない。今後いっそう教職課程研究室と連携を密にして、教職課程運営を行っていきたい。

しかし絵画基礎～絵画実習、つまり教科及び教科の指導法に関する科目としての学科別科目（造形専門科目）が、学科の必修授業と重複しているため、学生も教員もそれが教職課程の科目でもあることを意識しておらず、教養としてのそれではなく専門性の高い内容が施されている。改めて課題設定について教職履修者が学ぶべき内容を授業内容に適度に織り込んでいくこと、あるいは教育にスポットをあてた課題を選択肢として設定することを検討するかが、これからの課題であろう。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

『武蔵野美術大学 大学案内 2022』武蔵野美術大学、2022 年度入学生用 P22～27/P92～93

『教職課程ガイドブック』武蔵野美術大学、2022 年度入学生用 P18～19

『履修・学修ガイドブック』武蔵野美術大学 造形学部、2022 年 P48～81

4 上記 1 から 3 の項目における油絵学科油絵専攻の自己点検・評価を踏まえた総合評価

各科目の担当教員には、各領域で重要視されているような、アクチュアルなアーティストを配し、充実した内容の授業を実施できるよう努めている。年々多様性が増す学生への柔軟な対応についても目配りを怠っていない。

教員養成に関する動向や学内における教職関連の共有事項については、教職課程専門委員を通じて、専任教員間で共有できている。また、当該の科目を担当する非常勤講師へは即時性を担保できているとは言えないが、基本的に情報共有は行われている。

そして油絵専攻以外の学生が履修する、造形総合科目（造形専門科目）では教職課程履修者を念頭に置いた指導が行われている。一方で専攻内の教職課程履修者については担当教員

が対象者を把握して、特別な指導を行うことはしていないが、そこに問題がみられないのか検討が待たれる。つまり教科及び教科の指導法に関する科目として、学科別科目（造形専門科目）が含まれており、その内容について教員養成という視点も再検討し、充実した内容の授業を実施できるよう努めていく必要があるということだ。

いずれにせよ、武蔵野美術大学の中でもっとも多くの履修者を抱え、これまで数多くの教育現場に人材を送り出してきた油絵専攻研究室としては、教職課程研究室との連携をさらに密にし、より一層の充実を図りながら、今後も有能で魅力溢れる美術教員を社会に輩出する責任を大切に考え、教職課程の運営を継続して行きたい。

油絵学科版画専攻

教職課程科目にかかわる専任教員数 3名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 8名

1-1 油絵学科版画専攻における教職課程教育の目的・目標の共有

油絵学科版画専攻では、教職課程専門委員会委員を元田久治教授が担当し、会議での情報は随時報告している。また、教職の教科に関わる科目を担当する教員は、毎年更新される『教職課程ガイドブック』を確認し、適切な授業運営に努めている。教職履修者は毎年人数の変動があるが、その都度研究室で把握し、入学時のオリエンテーションや、履修期間に分からない事など対応し、記載漏れが無いよう配慮している。ここ10年の油絵学科の履修者は平成24年219人、平成25年214人、平成26年218人、平成27年215人、平成28年191人、平成29年184人、以降版画専攻で、平成30年36人、令和元年30人、令和2年26人、令和3年10人となっている。教職履修者は積極的な学生が多く、課題との両立も怠らないので安心して試みているのがここ数年の現状である。

1-2 油絵学科版画専攻の長所・特色

浮世絵や数々の歴史的出版物に代表されるように、版画は美術作品の領域を超え、社会とつながるメディアとして人々の生活に関わってきた。絵本やイラストレーション、写真、映像、立体など、アナログやデジタルを問わず、あらゆる複製メディア表現にその規範を広げる中、幅広い視野の中で表現者としての素養を習得していく。積み重ねられた版画の伝統に向き合うとともに、ファインアートとデザインの領域が多層的に重なり合う新たな学びの領域へ挑戦する人材を教員養成と共に育成したいと考えている。

1-3 油絵学科版画専攻における取組上の課題

学科内の教職履修者について、専任教員は把握しているが、非常勤講師においてはばらつきがある。事前に周知させる必要があり、改善の予知があると考えている。教職課程専門委員会での議論などの情報の共有は、非常勤講師にとって実技指導以外の必要な内容は限られているので、これに関してもこちらで内容を精査した上で周知したいと考えている。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

冊子名：2022 武蔵野美術大学油絵学科 グラフィックアーツ専攻紹介パンフレット

発行：武蔵野美術大学油絵学科版画研究室 1項（データ名：グラフィックアーツ事項）

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（油絵学科版画専攻の現状説明）

入学直後の学科のオリエンテーションの際も、将来的な就職に「中学校教諭一種（美術）」「高等学校教諭一種（美術）（工芸）」の教員免許を取得し、実績として教職についた過去の

学生の実例についても紹介している。油絵学科が文部科学省より正式に教職の認定を受けた学科であることも説明している。ただし、教職を履修した場合、取得しなければならない単位数が相当増えるため、安易に教職課程に登録するのではなく、よく考えてから判断するよう指導している。

2-2 油絵学科版画専攻の長所・特色

版画の技法は4つの版種以外にも多岐に渡る。これらの技法は中学、高校以外でも幼児教育から絵画療法など、偶発性を生かせる点で様々な所で実践されている。彫刻刀や、専門的な機械が使えない環境下においても実技指導ができるメリットがある。版画専攻で版画的な基礎的な教育を受ける事は、教育現場での応用が効く事という事である。

2-3 油絵学科版画専攻における取組上の課題

教育に関する授業、取り組みは学生に聞かれた時に個別に対応している。教員自ら率先してそのような取り組みをしていないのが現状であるが、日本の多くの小中学校の美術の授業で版画を作るようになったきっかけなど、そのような歴史（戦後版画運動、教育版画運動など）を紐解く事で、版画と教育が歴史的に密接である事を周知させる授業も今後考えられる。これは一例にすぎないが、特別講義で専門家を呼ぶなどして教育に関する理解を深める取り組みを検討したい。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

「版画芸術 No.196 2022 夏」2022年6月1日発行 発行 阿部出版株式会社 124 項
「彫刻刀が刻む戦後日本—2つの民衆版画運動」（データ名：版画芸術）

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

教務チームおよび教職課程研究室と確認をしながら、必要な科目を設置している。また、順次性を踏まえた学年配当をしており、基礎から応用へと無理なく学習できるようにしている。必要な事項が確実に実施されるよう、シラバスの点検を毎年行っている。
各科目は、その分野の経験豊富な専門家を充て、充実した内容となるよう努めている。
教科に関する科目と担当者は次の通り。

版画実習Ⅰ・Ⅱ[基礎版画実習]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、常田泰由、迫鉄平、尾関立子、板津悟）

版画実習Ⅲ[自主制作]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、常田泰由、迫鉄平、尾関立子、板津悟）

版画実習Ⅳ[油絵学科合同コンクール]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、常田泰由、迫鉄平、尾関立子、板津悟）

版画実習Ⅴ[自主制作・アーティストブック実習]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、常田泰由、迫鉄平、尾関立子、板津悟）

版画実習Ⅵ[自主制作]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、常田泰由、迫鉄平、尾関立子、板津悟）

版画実習Ⅶ[展示演習・自主制作]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、常田泰由、迫鉄平、尾関立子、板津悟）

版画実習Ⅷ[版画集制作・自主制作]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、常田泰由、迫鉄平、尾関立子、板津悟）

絵画基礎Ⅰ[ドローイングⅠ/銅版]（高浜利也、杵谷圭章）

絵画基礎Ⅱ[ドローイングⅡ/リトグラフ]（遠藤竜太、大坂秩加）

絵画基礎Ⅲ[シルクスクリーン]（遠藤竜太、元田久治、越智成実）

絵画基礎Ⅳ[木版]（元田久治、越智成実）

絵画基礎Ⅴ 複合版表現 [デジタル表現演習、ブックアート・絵本]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治）

絵画基礎Ⅶ[進級制作]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、常田泰由、迫鉄平、尾関立子、板津悟）

デザイン基礎（映像メディア表現を含む）（高浜利也）

工芸制作Ⅱ 版種選択授業[銅版・リトグラフ]（遠藤竜太、高浜利也、杵谷圭章、大坂秩加）

平面色彩構成 版種選択授業Ⅰ[木版・シルクスクリーン]（遠藤竜太、高浜利也、元田久治、越智成実、中村美穂）

3-2 油絵学科版画専攻の長所・特色

版画専攻の教育の特質は、まず1年次の「版で描く」という、ものを描く事を中心とした基礎的実習を主軸としている。感覚体験を実制作に展開させる実践形式の授業を元として、それらの授業が全ての造形力を培う事を最も重要な基盤と考えている。2年次は幅広い視野の中で表現者としての素養を習得するため、自由なテーマのもとで版画作品を制作するという課題を元に、基礎課程を通して培った表現力、描写力を進級制作へと昇華させる内容で、自らプラン立てをする事で自由な発想と幅広い見解を求めている。特に自主性を尊重するようにしている。

3年次の前期は改めて木版、銅版、リトグラフ、シルクスクリーンの4つの版種を集中的に学び、それに加えて自らの表現したい事をどのような素材と技法が必要かを探るという、自らにも問いかける大変重要な時期の課題である。版画は、技術が伴わないと表現にならない場合が多く、特に版種ごとの特性を持つ素材（版材、支持体、インク、顔料等）に着眼し、支持体となる紙や布についての知識を深めたりしながら、多角的に複数の視点から版表現を捉えさせるようにしている。4年次は高度な専門性を追求しながら、自由なテーマの下で制作をし、その中で前期中の課題である版画集の制作は企画、編集、造本研究などの取り組み

みを行う。版画集の取り組みは版画専攻が立ち上がった頃から現在まで続く伝統ある取り組みである。このように、様々な多様なカリキュラム構成と、学生自ら考え、学生同士や講師陣と意見交換する中で作品の独創性や完成度を上げると共に、教育における自発性や協調性も養われることが大きな特色である。また、教職課程研究室といっしょに積極的に授業づくりをしていることも本学科の特色である。令和3年度、令和4年度に版画専攻教授である高浜 利也教授が研究代表者として、JUCA 全国芸術系大学コンソーシアム芸術系教科等担当教員等 全国オンライン研修会の講師となって授業の実践研修を行った。解き放たれた版画ー表現としてのアートブックー子どもたちの豊かな思考力、判断力、表現力等の育成を目指してというテーマで、本分科会では、「解き放たれた版画ー表現としてのアートブックー 子どもたちの豊かな思考力、判断力、表現力を目指して」をテーマとして、第1回、第2回の研修を実施した。講師の同教職課程研究室大坪教授は、本研修会の配信センターから研修オンラインに入り、高浜教授、所助教、スタッフ2名は武蔵野美術大学版画研究室からオンラインに入るとともに、同研究室からの実況中継を行う形で研修を進めた。

3-3 油絵学科版画専攻における取組上の課題

教職課程専門委員会などからの情報は学科内で共有できていると思われるが、ベースとなる学習指導要領や同解説などについては、油絵学科内、版画専攻内でその内容まできちんと共有できているとはいえない。少なくとも、教科に関する科目に関わる教員は、これらの内容を確認する機会を持つ必要がある。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

データ名：履修・学修ガイドブック 造形学部 2022 52 項、53 項

4 上記1から3の項目における油絵学科版画専攻の自己点検・評価を踏まえた総合評価

教員養成の動向や学内での教職に関わる共有事項については、教職課程専門委員会委員を通じて、専任教員の間では共有できている。ただし、非常勤講師を含む学科全体で共有ということを考えると不十分なところがあるので、必要事項を精査した上で情報を共有していきたい。本学科の教育は、版画という教員養成上の要求にも十分に応えるものになっている。ただし、こうした長所が意識的に整理され、展開されているわけではない。こうした点が意識的に整理されていくと、より充実した時代に即した教員養成ができられると思われる。教職課程研究室と連携した授業づくりはこれからさらに重要な役割があると認識しているが、この点をいっそう充実させていきたい。

彫刻学科

教職課程科目にかかわる専任教員数 4名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 7名

1-1 彫刻学科における教職課程教育の目的・目標の共有

教職履修者については1年次より研究室内で把握し、その履修状況に応じて、学科の集中授業（専門実技）についてのアドバイスを学生におこなっている。例えば、集中の選択授業における選択肢についてのアドバイス＝学生個々の教職についての目的や意欲に応じた選択内容の相談、推奨をするなど。また、教育実習によって、集中授業の受講が難しい場合は、それぞれの学生の実習状況に応じたペースで授業と講評が受けれる様に、教員が情報を共有した上で対応をしている。

1-2 彫刻学科の長所・特色

本学科が定義する彫刻とは「新しいリアリティを見つける身体的な試行であるとともに、世界と関わる具体的な技術」であり、それはひいては「芸術領域の創造の可能性を示唆」するものでもあります。その探求の為のカリキュラムの基本姿勢として「同時代の美術とは何かを問い続け」「素材と対峙しながら美術の歴史を知り、制作の環境をつくる」ことを続けています。自身の課題を創造的に発見し、その探求の方法を表現として深め展開できる人間の育成を、物質や空間との関わりから学生とともに行っています。教職課程との関連でいえば、物質を扱うと表現である彫刻の特性である思い通りにいかない作業からの課題の発見と解決を学ぶことは、そのまま教職において必要な人材の育成にも繋がることではないかと考えています。その為の方法として、制作と並行して対話、ディスカッションを重視した授業を積極的に展開しています。事実、教育実習においては、彫刻において学んだ知見を模擬授業に活かすことで、自身の課題を教育の現場で共有し、そこから新たな課題を発見しようとしている学生も見受けられます。

1-3 彫刻学科における取組上の課題

上記の姿勢に基づき、本学科で担当している教職授業「デザインⅡ」については、例年、その時々学生の特色、個性に応じて、授業の振り返りを行い、細かい進行方法や、素材、テーマの修正をおこなっている。今後も、将来求められる中高の美術教員のあり方を検討し、教職を志す学生にとってより有効と思われる授業課題を検討していきたい。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

武蔵野美術大学入学センター「武蔵野美術大学 大学案内 2023」武蔵野美術大学、2022年、pp.68-71

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（彫刻学科の現状説明）

入学直後の学科のオリエンテーションの際に、各教員免許の資格を取得できることは伝える。同時に、履修した際の取得単位数についても伝えることで、安易に教職課程に登録するのではなく、よく考えてから判断するよう指導をしている。また、各学生の授業の様子を観察し、教職の授業とそれ以外の授業のバランスが取れているか、進級時に確認をすることで、学生が、できる限り無理のない形で教職授業にも取り組めるように心がけている。

2-2 彫刻学科の長所・特色

ものづくりを技術としてではなく、「つくる」「みる」「かんがえる」の総合として捉えるのが本学科の特色である。1年次の基礎過程は、このポリシーが具体的な授業課題に反映されている。特に入学最初の授業では、一畳分の段ボール4枚によって人体を作品化していく。どこにでもある素材をどの様に見て、作品の素材として活用していくか。その判断と方法が問われる。基礎過程において、まず自身で方法を発見していくことを追求し、そこで養われた視点をもとに、2年次では、自身で選択課題を選び、自身でカリキュラムを組んでいく。自身で選び、発見することを重視し、その媒介として物質と向き合っていくことが本学の特徴である。このことによって、自身で世界の事象に対して、課題を発見し向き合っていくことが可能になる。彫刻をキーワードした教育だが、この彫刻という前提すらも自身の視点で疑いを持ち、課題として向き合っていくことが可能である。このことは、教育全般においても重要なことであると考えている。

2-3 彫刻学科における取組上の課題

上記の基本姿勢と授業設計は、今後においても有効な方針であると考えているが、その中身の各課題については、学生の変化に応じて、柔軟な対応が必要である。特に近年の学生は、デジタルに慣れていることの反動からか、石や木などの手応えのある素材に惹かれる傾向もある。いまの学生の実情を鑑みつつ、研究室として長期的な視野にたって残すべき内容は残しつつ、個別の授業内容の検討はしていきたい。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

伊藤誠、富井大裕監修「武蔵野美術大学 彫刻学科 学科紹介 2022」武蔵野美術大学 彫刻学科研究室、2022年

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

教務チームおよび教職課程研究室に確認をし、必要な科目を設置している。

各科目は、その分野の経験豊富な専門家を充て、充実した内容となるようシラバスの確認、検討を毎年おこなっている。

基礎から応用へと無理なく学習できるような授業展開を心がけている。

教科に関する科目と担当者は次の通り。

造形総合・絵画Ⅰ（大浦一志、原一史、山本靖久、渡辺えつこ、結城康太郎、今井俊介、早川祐太、衣川明子）

デザイン基礎（伊藤誠、伊藤真一、清水恒平、情報教育センター）

デザインⅡ（細井篤、桑名紗衣子、牛島達治、高柳恵里、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

工芸制作Ⅰ（工芸工業デザイン学科、大村俊二、神藤修、宗像重幸、竹田精一郎、近岡令、丸岡勇太、井尾鉦一、西川聡）

基礎造形（細井篤、桑名紗衣子、牛島達治、高柳恵里、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻A（細井篤、桑名紗衣子、牛島達治、高柳恵里、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻B（細井篤、牛島達治、高柳恵里、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻E（細井篤、桑名紗衣子、牛島達治、高柳恵里、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻F（細井篤、桑名紗衣子、牛島達治、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦、共通彫塑研究室）

彫刻G（細井篤、桑名紗衣子、牛島達治、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦、共通彫塑研究室）

彫刻H（丸山富之、棚田康司、箕輪亜希子、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻I（丸山富之、棚田康司、箕輪亜希子、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻J（丸山富之、棚田康司、箕輪亜希子、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻K（丸山富之、棚田康司、箕輪亜希子、Azby Brown、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻L（細井篤、桑名紗衣子、牛島達治、丸山富之、棚田康司、箕輪亜希子、Azby Brown、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻M（丸山富之、棚田康司、箕輪亜希子、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

彫刻N（丸山富之、棚田康司、箕輪亜希子、富井大裕、黒川弘毅、伊藤誠、三沢厚彦）

3-2 彫刻学科の長所・特色

彫刻学科の特色は、基礎過程において「よく知っているものを疑う為の様々な方法」を授業課題において経験していくことにあります。これを、学科では表現の基礎と捉えています。具体的には「つくる」「みる」「かんがえる」ことをひとつの表現の中で、素材や空間と向き合いながら捉えていくこと。この世界を見て、経験していくことにおいて必要な要素を基礎に据えた上で、専門課程に進み、自身の表現の課題を発見していきます。

また、上記の学科の特色＝授業、素材への取り組み方を、各授業の担当教員が率直に綴り、解説をした教科書「わからない彫刻」を、共通彫塑研究室と共同で現在、出版準備中である。

3-3 彫刻学科における取組上の課題

本学科における彫刻の考え方は、教職の内容とも親和性、共通するものがあると考えている。その考えに基づき、教職の授業においても集中授業と互換性のある内容を検討することで、学科と教職を学生が思考的に繋げて考えることのできる授業設計を、教職課程研究室とも連携を取りながら考えていきたい。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

伊藤誠・冨井大裕監修「武蔵野美術大学 彫刻学科 学科紹介 2022」武蔵野美術大学彫刻学科研究室、2022 年

「教職課程ガイドブック（2022 年度入学生用）」武蔵野美術大学学生支援グループ教務チーム、2022 年、pp.22-23

4 上記 1 から 3 の項目における彫刻学科の自己点検・評価を踏まえた総合評価

これまでの教職の学生、また卒業後、教職についている卒業生の様子、意見、感想からも、本学科が取り組んでいる教育理念、人材育成の理想は、実際の教職で求められる教員像とも共通性があると考えている。その視点を保持しつつ、現今の教育現場で求められる教員人材の実情を鑑みながら、当該学生が学科と教職の間で意識を分かれることなく、むしろその相互作用を通じて、教育への独自の知見を有していけるように授業設計を検討していくことが肝要である。その為にも、他学科、教職課程研究室との連携を深めていくことが必要である。また、教員養成の動向や学内での教職に関わる共有事項については、教職課程専門委員会委員を通じ、研究室スタッフ及び、専任教員間では共有しているが、非常勤講師への共有は、まだまだ不十分な面もあると痛感する。学習指導要領や教職課程コアカリキュラムについての知識を深める機会を設けることも今後検討していきたい。

視覚伝達デザイン学科

教職課程科目にかかわる専任教員数 9 名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 20 名

1-1 視覚伝達デザイン学科における教職課程教育の目的・目標の共有

視覚伝達デザイン学科では、現在、教職課程専門委員会委員を齋藤啓子教授が担当している。教職課程専門委員会での議論や配布資料は、研究室会議で齋藤教授より報告し情報の共有を行っている。

学科内の教職履修者については、所属ゼミ等の指導教員および助教は把握しており、介護等体験や教育実習の際には、そうした実習に学生が集中できるようにしている。

教職の教科に関わる選択授業科目を担当する教員は、適切な授業運営に努めている。

1 年生、2 年生必修の基礎課程がすべて教職免許状(美術・工芸)に関わる必修授業であることを、研究室全体が認識しているとはいえない。毎年更新される『教職課程ガイドブック』を年度当初に研究室全体で確認したい。

ここ 10 年の視覚伝達デザイン学科の教職課程履修者（入学年度の教職登録者）は、2013(平成 25)年度 6 人、2014(平成 26)年度 3 人、2015(平成 27 年度)7 人、2016 (平成 28)年度 4 人、2017(平成 29)年度 4 人、2018(平成 30)年度 6 人、2019(令和元)年度 3 人、2020(令和 2)年度 6 人、2021(令和 3)年度 5 人、2022(令和 4)年度 5 人となっている。学年途中から、または卒業後に教職履修を希望する者もいる。

2021(令和 3)年度卒業生 2 名が現在高等学校の教員となっている。 "

1-2 視覚伝達デザイン学科の長所・特色

「社会的な視点から情報をとらえ直し、再構築することができる知性と行動力、人々の感性に共鳴しうる高度な技術と美意識を持った専門家=デザイナーや、現代社会とその未来に対応する創造的な担い手、新しい時代のヴィジュアル・コミュニケーションのとびらを開く人材の育成を教育目標とする。」

「ヴィジュアル・コミュニケーションを支える文字や図像などの視覚言語を印刷や映像、インタラクティブツールなど様々なメディアに展開してきたデザインは、時代とともに常に新しい表現形態とコミュニケーションの形式を生み出し、私たちの社会の形成に深く関わっています。特に今日のデジタル技術の急速な浸透は私たちの日常生活はもとより、様々な産業や文化における情報環境を大きく変えつつあります。こうした状況の中でいま求められているのは、社会的な視点から情報をとらえ直し、再構築することができる知性と行動力、人々の感性に共鳴しうる高度な技術と美意識を持った専門家=デザイナーです。その能力を育てる為に、大学は過去に蓄積された優れた美とコミュニケーションの原理を深く学ぶ場であると同時に、それらを現在のテクノロジーと交差させ、統合し新たな環境、メディア

における今日的な課題に果敢に挑戦する場であることが求められています。現代社会とその未来に対応する創造的な担い手を育成し、新しい時代のヴィジュアル・コミュニケーションのとびらを開く人材を育てる。それが視覚伝達デザイン学科の目的です。」（本学科の教育上の目的より教育理念・目標と3つのポリシー | 武蔵野美術大学 (musabi.ac.jp)）
本学科では、同様の資質・能力を備えた人材が教育の世界でも活躍してくれることを期待し、教員養成を行うものである。 "

1-3 視覚伝達デザイン学科における取組上の課題

視覚伝達デザイン学科の教育理念・教育目標については、専任教員、非常勤教員にも共有されている。教職課程科目についての情報は、教職必修選択科目担当以外の非常勤講師等にはあまり共有されていない。非常勤講師が出席する拡大研究室会議などでの情報提供が望まれる。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

2020 年以降の主な参考資料は以下のとおり。

- ①武蔵野美術大学入学センター『武蔵野美術大学大学案内 2022』武蔵野美術大学、2021 年、40 頁。
- ②寺山祐策・齋藤啓子監修『武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科学科紹介 2020』武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科研究室、2020 年、32 頁。『同 2021』『同 2022』。
- ③寺山祐策監修『ヴィジュアル・コミュニケーション・デザイン・スタディ視覚伝達デザイン学科が目指すもの』武蔵野美術大学出版局、2022 年、240 頁。
- ④白井敬尚著「排版造形」湖南美術出版社、2021 年、284 頁。
- ④大田暁雄著「世界を一枚の紙の上に」オーム社、2021 年、270 頁。
- ⑤古堅真彦著「デザイン・マス 数学とデザインをむすぶプログラミング入門」BNN、2022 年、247 頁。
- ⑥西本企良著「アニメーション 想像をいざなう形と動き」武蔵野美術大学出版局、2022 年、141 頁。 "

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（視覚伝達デザイン学科の現状説明）

入学直後の学科のオリエンテーションの際、「中学校教諭一種（美術）」「高等学校教諭一種（美術）（工芸）」の教員免許を取得できることなど教職についても取り上げている。しかし教務チーム教職担当の全体説明に委ねている部分も多く、視覚伝達デザイン学科が文部科学省より正式に教職の認定を受けた学科であるという説明はしていない。

教職を履修した場合、取得しなければならない単位数が増えるため、安易に教職課程に登録するのではなく、よく考えてから判断するよう指導している。

2-2 視覚伝達デザイン学科の長所・特色

子どもを対象にしたデザインに取り組む授業があることは本学科のひとつの特徴である。2 年次空間構成Ⅱで行っている積み木のデザイン、視覚表現演習 C のトイデザイン、3 年次空間構成Ⅲで行っている造形ワークショップ、環境デザインで取り組んでいるコミュニティデザインは長年継続しており、成果が蓄積されている。

これらの授業の経験から、知育玩具や社会教育プログラムなど、子どもに関わる卒業制作を行う学生が毎年いる。

教育に関わる仕事についての講義も行っている。近年では、教育番組『しまじろうのわお!』の総合演出を手掛ける江里口徹平さん(本学科卒業生)を招いてコンテンツ作成の魅力を語ってもらったり、科学絵本作家の岩渕真理さん(本学科卒業生)に自然観察研究とイラストレーションについて語ってもらうなどしている。これらのインタビューは本学科の HP でも紹介している。

具体的なものを制作することを通して教育を実現しようとしていること、また、教育を学校教育という枠組みの中だけでなく、よりよい社会生活の実現のための全人的な美術・デザイン教育と捉えているのも本学科の特色である。

研究室のスタッフを経て、教職免許は持たないが高校の講師に着任するもの、卒業後に必要な資格を得て、幼稚園教諭、保育園保育士、保育園アトリエスタとなっている卒業生もいる。

2-3 視覚伝達デザイン学科における取組上の課題

各授業の中で、「美術の時間に使える教材を開発する」などの具体的な教職に関わるテーマに取り組んではいない。

3 年次、4 年次の授業で何を研究や制作のテーマとするかは学生に委ねられているが、教育に関わるテーマの作品制作やプロジェクト企画などは、複数見られる。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

- ①武蔵野美術大学入学センター『武蔵野美術大学大学案内 2022』武蔵野美術大学、2021 年、40 頁。
- ②寺山祐策・齋藤啓子監修『武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科学科紹介 2020』武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科研究室、2020 年、32 頁。『同 2021』『同 2022』(以上を年発行)
- ③寺山祐策監修『ヴィジュアル・コミュニケーション・デザイン・スタディ視覚伝達デザイン学科が目指すもの』武蔵野美術大学出版局、2022 年、240 頁。

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

教務チームおよび教職課程研究室と確認をしながら必要な科目を設置している。

受講希望が多いイラストレーションの授業をⅠ・Ⅱ・Ⅲとして選択機会を増やすなど、学生が履修しやすいように改善をしている。

2020～2021年においては、コロナ禍で急遽始まったオンライン授業実施において、基礎教育課程のシラバスを点検しリニューアルする機会を得た。子どもを対象にしたオンラインでのワークショップも試みた。

2022年度の教科に関する科目と担当者は次の通り。

絵画基礎(映像メディア表現を含む)(大浦一志・原一史・山本靖久・一色映理子・今井俊介・齋藤典久・早川祐太・結城太朗・石塚英樹・齋藤啓子)

イラストレーションⅠ(片山裕・横山宏)

イラストレーションⅡ(齋藤好和)

イラストレーションⅢ(横山宏・片山裕)

造形総合・彫刻Ⅰ(戸田裕介・山本一弥・長谷川さち・正親優哉・川崎広平・松本隆・岡田健太郎・杉内あやの・諸貫きよ恵・桜井かえで・高野正晃・多和圭三)

空間構成Ⅰ(石塚英樹・大田暁雄・北崎允子・齋藤啓子・中野豪雄・ソヌミン)

色彩構成Ⅰ(石塚英樹・大田暁雄・北崎允子・齋藤啓子・中野豪雄・ソヌミン)

タイポグラフィ(白井敬尚・木村文敏・鈴木功・本多育美・渡邊翔)

視覚伝達造形基礎(石塚英樹・大田暁雄・北崎允子・齋藤啓子・中野豪雄・ソヌミン)

視覚伝達デザイン演習(中野豪雄・上田和秀・山口弘毅)

構成演習(大田暁雄・北崎允子・後藤映則・中野豪雄・古堅真彦・石垣貴子)

メディア演習(中野豪雄・石井雄一郎・谷田幸・山口弘毅・)

空間構成Ⅱ(鈴木基真・飛山祐幸)

空間構成Ⅲ(環境デザインⅠ-A/Ⅱ-A)(後藤映則・齋藤啓子・花崎攝)

製図(工藤陽介・倉方雅行)

視覚デザイン論Ⅰ(陣内利博・他当学科専任教員全員)

視覚デザイン論Ⅱ(陣内利博・他当学科専任教員全員)

印刷概論(奥窪宏太)

造形総合・彫刻Ⅱ(視デ研究室では受講生を把握していない)

図法・製図Ⅰ(本学科では開設していない)

図法・製図Ⅱ(本学科では開設していない)

3-2 視覚伝達デザイン学科の長所・特色

視覚伝達デザイン学科の教育の特質は、まず基礎課程における基礎概念を入門ととらえず、全ての造形を支える最も重要な基盤と考えていることである。そこでは学生個々が持つ感性と知覚能力の覚醒とその開発を目指している。それを前提に身体の開張としてアナログからデジタルに至る多様なメディアを工房教育も含めて実践的に学ぶ。さらに環境を観察し情報を収集し、それらを編集、構成することのクリエイティビティ(創造性)とダイナミ

ズム（楽しさ）をデザインの基礎として学ぶ。その為のユニークなカリキュラムとして、高学年において 30 種以上の多様な専門教育のプログラムが用意されている。学生はこれら先端的かつ高度なデザイン実務と理論を主体的に選んで組み合わせ、多様な専門性を自らが統合していく。このようなカリキュラムの特質上、本学科で学ぶ学生全員が多様なメディアを自由に使いこなすスキルを包括的に身につけることになる。ICT に精通し、なおかつ、さまざまな変化に柔軟に対応しうる教員が求められるようになったが、この時代の要求にも本学科のカリキュラムは的確に応えるものとなっている。

1・2 年生の基礎教育課程では、ワークショップ形式による段階的なプログラムやグループワークを取り入れたプログラムを作成しており、学生どうしで自主的に進める学習環境を整え、授業運営に参加する学習態度醸成の役割を果たしている。

空間構成Ⅱでは、授業での学習成果をもとにした小学校、高校への学生による出前授業を例年行っている（現在は休止中）。

空間構成Ⅲ（前期/環境デザインⅠ-A）では、子どもを対象にした造形ワークショップの計画・実施を毎年夏に行っている。コロナ禍においても 2020 年、2021 年はオンラインで実施した。後期/環境デザインⅡ-A では、小学校、図書館、公民館、病院などの公的施設や地元企業と連携し、多世代・多様な人々との地域連携プロジェクトを実施している。

小平第十二小学校との図工の連携授業の事例は、「地域とつながる・未来のまちをつくろう」教科書、日本文教出版（図画工作 5・6 年上、2020 年）に掲載されている。

文部科学省選定「造形ファシリテーション能力獲得プログラム」としてスタートした授業科目「ワークショップ実践研究Ⅰ」「ワークショップ実践研究Ⅱ」は、教職課程研究室の高橋陽一教授・三澤一実教授と本学科の齋藤啓子教授とで共同開講している。

ワークショップ実践研究Ⅰ・Ⅱでは「ルネこだいら子どもの広場」「電車でつなごう立川西地下道プロジェクト」などの地域連携プロジェクトにも取り組んでいる。

教職のテキストである高橋陽一編『造形ワークショップの広がり』（武蔵野美術大学出版局、2011 年）にも齋藤教授が執筆し、本学の教職課程の運営に間接的にかかわっている。

小平市大学連携協議会加入大学の一員として「まちで楽しむ」「こだいら NPO 体験セミナー」などを開催し、教職履修生の体験の場と実践のフィールドを広げる機会をつくっている。

3-3 視覚伝達デザイン学科における取組上の課題

教職課程専門委員会などからの情報は共有しているが、教科に関する科目に関わる教員は、少なくとも学習指導要領や同解説などについての内容を確認する機会があるとよい。

当学科のカリキュラム構成上の制約で、3 年次の教職必修授業空間構成Ⅲを選択する際に教職履修継続をやめて必修ではない別の授業を選択することがある。3 年次のカリキュラムには、前期・後期にそれぞれ選択する科目と通年でひとつ選択する授業の 2 本立てとなっており、空間構成Ⅲが通年授業（環境デザインⅠ-A/Ⅱ-A）の一部となっているためである。

教職課程研究室と本学科のつながりはあるが限られている。しかし、当学科の基礎課程にお

けるカリキュラムには、小・中・高の美術・デザイン教育に応用可能なテーマも多く(色彩・形体・文字・意味作用など)、積極的な情報交流や多様な連携の仕組みが望まれる。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

- ①『教職課程ガイドブック(2022年度入学生用)』武蔵野美術大学学生支援グループ教務チーム、2022年、16-37頁。
- ②寺山祐策・齋藤啓子監修『武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科学科紹介2020』武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科研究室、2020年、32頁。『同2021』『同2022』(以上を毎年発行)
- ③寺山祐策監修『ヴィジュアル・コミュニケーション・デザイン・スタディ視覚伝達デザイン学科が目指すもの』武蔵野美術大学出版局、2022年、240頁。
- ④上原幸子・齋藤啓子・朝比奈ゆり・萩原修著「デザインとコミュニティ」武蔵野美術大学出版局、2018年、1章、2章、3章。
- ⑤高橋陽一編「造形ワークショップの広がり」武蔵野美術大学出版局、2011年、199-221頁。
- ⑥図画工作5・6年上「地域とつながる・未来のまちをつくろう」日本文教出版、2020年。
- ⑦シラバス「空間構成Ⅱ」シラバス参照(musabi.ac.jp)
- ⑧シラバス「空間構成Ⅲ」シラバス参照(musabi.ac.jp)
- ⑨シラバス「環境デザインⅡ」シラバス参照(musabi.ac.jp)
- ⑩シラバス「ワークショップ実践研究Ⅰ」
http://syllabus.musabi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusReferenceContentsInit.do;jsessionid=d5VU2AMys-ML7khbB7DNFu4y.kmap1?subjectId=225100004827&formatCode=1&rowIndex=0&jikanwariSchoolYear=2022&ksSessionFlag=1&keepScrollTop=0
- ⑪シラバス「ワークショップ実践研究Ⅱ」
http://syllabus.musabi.ac.jp/ext_syllabus/syllabusReferenceContentsInit.do;jsessionid=d5VU2AMys-ML7khbB7DNFu4y.kmap1?subjectId=225100004828&formatCode=1&rowIndex=1&jikanwariSchoolYear=2022&ksSessionFlag=1&keepScrollTop=0

4 上記1から3の項目における視覚伝達デザイン学科の自己点検・評価を踏まえた総合評価

教員養成の動向や学内での教職に関わる共有事項については、教職課程専門委員会委員を通じて専任教員の間では概ね共有できているが、非常勤講師を含む学科全体での共有はしていない。美術・デザインへの興味関心を育てる人材育成における大学の役割を認識するためにも、学習指導要領や教職課程コアカリキュラムについての知識を得る機会があるとよ

い。

本学科の教育は、アクティブラーニング、GIGA スクール、S T E M A 教育といった政府の構想とこれらを踏まえた教員養成上の要求にも応えられるものになっている。ただし、政府構想を意識して展開されているわけではない。こうした長所を意識することにより、学科の強みを活かした教員養成がより積極的にできると思われる。教職課程研究室との連携を継続し、より多様な協働の機会をつくることが望まれる。

小中高との連携による美術大学入学前の学習環境形成、大学連携・社会連携・地域連携プロジェクトによる美術大学の社会的価値の醸成に関わることなどが、少しずつ評価され始めている。今後も継続できる仕組みとネットワークをつくりたい。

工芸工業デザイン学科

教職課程科目にかかわる専任教員数 10 名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 42 名

1-1 工芸工業デザイン学科における教職課程教育の目的・目標の共有

教職専門委員会での議論内容や連絡事項は、委員が必要に応じて担当の教員へ適宜報告し運営に努めている。

工芸工業デザイン学科の教職履修者に関しては、全体を教職課程委員が把握し、各コースの履修者は担当コースの教員、助手が把握している。教育実習など学科の授業が重なる場合は夏休み期間などに制作時間を確保するような配慮をしている。

教職履修者の推移は、H24年度86人 H25年度83人 H26年度78人 H27年度66人 H28年度48人 H29年度45人 H30年度45人 R1年度では47人 R2年度46人 R3年度49人で、減少傾向にあり、H28年からは大きく減っている。履修者の多くは意欲的に取り組んでいる。

1-2 工芸工業デザイン学科の長所・特色

教育研究上の目的

工芸工業デザイン学科は、人間の制作とモノに関わりをもち、心地よい暮らしをデザインするための豊かな感性と幅広い知識、問題意識を養い、多様化する人々の価値観と絶えず変革する技術を見据え、次代が求める解決策に積極的に取り組む思考・表現力、社会との連携を図れる人材の育成を教育目標とする。

学科理念・教育目標

工芸工業デザイン学科は1959年に生産性美術計画者（当時の用語）の養成場として、産業デザイン科の名称で本学に設立されました。当時の日本の状況は、第二次世界大戦後の混乱から抜け出し、経済の基盤を築く産業界の活動が大きく動き始めて、家庭用電化製品の普及や、純国産自動車の生産がはじまっていました。デザイン界ではすでに、日本インダストリアルデザイナー協会（1947年）、日本デザイナークラフトマン協会（1951年）、日本インテリアデザイナー協会（1953年）と相次いで設立されており各領域のデザイナーの活動は、私たちの日常生活の隅々にまで浸透し、社会生活に大きな影響力を与えつつありました。そのような世相の中で、工芸工業デザイン学科は、伝統的な工芸技術を継承しつつ、工芸の世界を広く解釈して、産業的な側面を考慮し、現代生活の中に活用出来るモノ作りを基軸にデザイン活動を繰り広げてきました。社会と個人のフィロソフィーを大切にしたい3つの領域を1つの学科としてまとめた新しいタイプのデザイナー養成教育機関の発足となり、これは本学が日本で最初になります。技術に偏重しないアプライドアートの世界を展開する「クラフトデザインコース」。急速な技術革新を経て、今日なお発展していく産業社会に対応し

ながらより望ましい生活環境を構築する役目を担う「インダストリアルデザインコース」。人の意識と行動を踏まえた空間、そしてその空間を形成する製品を考察する「インテリアデザインコース」。この3つの領域から、日常生活に密着した様々なデザインされた道具や素材の研究を繰り返します。ID（インダストリアル）、INT（インテリア）、CRAFT（クラフト）と領域は分けて学びますが必要があれば、その領域を超え追求を深めることが可能な学科であることが特徴で、そこから生まれる柔軟で斬新なデザインを世に送り出すことを目標とします。

工芸工業デザイン学科ではインダストリアル、インテリア、クラフトの3コースから構成され、人間の生活すべてのコトやモノに関わるデザイン教育を実践している。中でもクラフトコースでは、工芸教育の専門家を育成できるようなプログラムを多数用意し実践している。またプロダクトデザインの実践を通じて、日本のものづくりの特徴や思想を学び、日常の暮らしを創造的に考える事が、中高の教育にも役立つと考える。

1-3 工芸工業デザイン学科における取組上の課題

工芸工業デザインでは、他学科の履修者の工芸制作の授業を自学科のカリキュラムと並行して行っている。学科の繁忙期と重なる時期もあり、工房の共用使用や十分な指導体制、スタッフの確保が難しく開講時期を夏休みなどにできれば解決できることもある。

また、工芸制作の授業を非常勤講師を中心に行っているが教職課程専門委員会での議論などが十分に共有されていない。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

『武蔵野美術大学大学案内2022』49頁 武蔵野美術大学入学センター

武蔵野美術大学ホームページ 工芸工業デザイン学科案内

武蔵野美術大学ホームページ 工芸工業デザイン学科研究室サイト

工芸教育課程表参照 工芸制作 1週～4週(彫刻) 17週～19週(日本画 油 版画 芸文)

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（各学科の現状説明）

入学後のオリエンテーションの際に教員免許の取得について説明し相談も受け付けている。

2-2 工芸工業デザイン学科の長所・特色

工芸やプロダクトデザインなどものづくりを実践する事が学科の特徴である。より専門的なスキルと知見を深める研究の一方でものづくりのプロセスが社会問題の解決や仕組み作りなど広い分野に広がっているため、多様な視点をもった人材の育成に力点を置いている。美術教育のカテゴリーの他に、地域や社会活動、テクノロジー教育の分野でも能力が活かされることを期待し教育をおこなっている。

2-3 工芸工業デザイン学科における取組上の課題

産学など社会連携を積極的におこなっているが、工芸などが教育の分野で活用されることがあってもよい。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

工芸工業デザイン学科ホームページ 研究室サイト

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

基礎実習Ⅰ	山中	伊藤	稲田	中原	田中	鈴木	大村	西川	熊野	高橋
基礎実習Ⅱ	山中	伊藤	稲田	中原	田中	鈴木	大村	西川	熊野	高橋
基礎実習Ⅲ	山中	伊藤	稲田	中原	田中	鈴木	大村	西川	熊野	高橋
基礎実習Ⅳ	山中	伊藤	稲田	中原	田中	鈴木	大村	西川	熊野	高橋
クラフトデザインⅠ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅡ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅢ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅣ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅤ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅥ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅦ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅧ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅨ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
クラフトデザインⅩ	鈴木	大村	西川	熊野	高橋					
インダストリアルデザインⅠ			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅡ			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅢ			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅣ			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅤ			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅥ			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅦ-A			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅧ-A			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅨ			稲田	中原	田中					
インダストリアルデザインⅩ			稲田	中原	田中					
インテリアデザインⅠ	山中	伊藤								
インテリアデザインⅡ	山中	伊藤								
インテリアデザインⅢ	山中	伊藤								
インテリアデザインⅣ	山中	伊藤								

インテリアデザインⅤ-A 山中 伊藤
インテリアデザインⅥ 山中 伊藤
インテリアデザインⅦ-A 山中 伊藤
インテリアデザインⅧ 山中 伊藤
インテリアデザインⅨ 山中 伊藤
インテリアデザインⅩ 山中 伊藤

表現実習ⅠA 山中 伊藤 稲田 中原 田中 鈴木 大村 西川 熊野 高橋
絵画基礎（映像メディア表現を含む。） 伊藤 大浦 原 山本 斎藤 伊藤 今井
造形総合・彫刻Ⅰ 戸田 山本 長谷川 多和 高野 櫻井 松本 川崎 岡田 諸貫
正親 杉内

3-2 工芸工業デザイン学科の長所・特色

工芸の制作やプロダクトデザインの分野を中心としながら美術とデザインの領域における総合的な造形教育を通じて、深く専門のスキルの取得とその応用を繰り返す中で、より良い社会の発展を見据えた、広い視野を持った人材を育成することを目的にしている。

1、2年生の授業では、さまざまな素材を使用した作品を制作することで、現実社会や自然環境につながる感性と身体感覚を養い、ものと人間の関係を深めることを実践的におこなっている。2年次後半からクラフト インダストリアル インテリアのコースに分かれ、より専門的な学習と研究を行うが、プロダクトデザインの分野では産学など現実の社会と関係を深めるなかで先端的で高度なデザインを学び提案できる人材を育成している。

中高の教育の現場においては、それらの高いスキルを活かし美術教育のカテゴリーを超えてテクノロジーや社会活動など総合学習やイノベーションを目指す教育者の育成にも対応できる。

また、さまざまなテクノロジーが進化する時代にあっても、自然素材を使用すること。手で作ることの大切さや五感を通して養う感性を重視し、トライアンドエラーを行いながら作品制作を続ける経験は、人間力を養う教育に生かされている。

3-3 工芸工業デザイン学科における取組上の課題

工デでは、産学や地域活性などの社会連携は頻繁に行っているが、小中高の学校教育との関わりはほとんどない。今後はものをつくる楽しさやそれに伴う学習の効果が期待できれば、検討される必要がある。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

『武蔵野美術大学大学案内2022』49頁 武蔵野美術大学入学センター
武蔵野美術大学ホームページ 工芸工業デザイン学科案内
武蔵野美術大学ホームページ 工芸工業デザイン学科研究室サイト

4 上記1から3の項目における工芸工業デザイン学科の自己点検・評価を踏まえた総合評価

工芸工業デザイン学科では、教職課程について委員会で議論された内容や報告事項についてそれに関わる専任には共有されているが、非常勤講師、助手には共有が不十分である。

また、新任の教員には教職課程ガイドブックを参照に説明する必要がある。

授業内容に関しては、教員育成に関する要件を満たしていると思われ、学科の長所を生かしていきたい。

また、工芸工業デザイン学科のものづくりの考え方や創造性は、教育の現場で何かを作り出す喜びや物事の改善や解決に大きく役立つことを期待したい。

空間演出デザイン学科

教職課程科目にかかわる専任教員数 9 名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 53 名

1-1 空間演出デザイン学科における教職課程教育の目的・目標の共有

空間演出デザイン学科では議論や配布資料は研究室会議によって情報の共有を行なっている。

教職履修者についてはゼミの担当教員、助手が把握している。

教育実習の時期は学生が集中できるように配慮している。

毎年配布されている「教職過程ガイドブック」は教員が確認をして適切な授業に活かせるように努めている。

教職履修者の多くは意欲的に取り組んでいるが推移は H24 年度 74 人、H25 年度 76 人、H26 年度 78 人、H27 年度 66 人、H28 年度 48 人、H29 年度 40 人、H30 年度 40 人、R1 元年度 47 人、R2 年度 40 人、R3 年度 41 人と減少している。

1-2 空間演出デザイン学科の長所・特色

空間演出デザイン学科は「空間」という視点から思考、想像、創造し次代の生活文化を豊かに創造できる人材の育成を教育目標としている。

美術・デザインの歴史や技法、新しいメディアや技術への理解を深めること、独自の表現力と豊かな創造性を養い、人間の営みが展開される空間を、より豊かに美しく形づくるデザイナーとともに教職に必要な人材を育てます。

1-3 空間演出デザイン学科における取組上の課題

教育過程についてはゼミの担当教員が学生の把握をしているが、研究室内での情報共有はある程度の把握と理解はあるが情報共有が不十分なこともあるため、より把握できるように取り組めればと考えられる。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

「武蔵野美術大学 案内 2022」54 頁 武蔵野美術大学入学センター

武蔵野美術大学ホームページ 空間演出デザイン学科案内

空間演出デザイン学科 ホームページ 研究室サイト

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（各学科の現状説明）

入学後のオリエンテーションの際に教員免許の取得についての説明、教職履修の取得の単位数の増加の説明、その後相談も受けている。

2-2 空間演出デザイン学科の長所・特色

学科には4コース（セノグラフィ、インテリア、ファッション、環境デザインにおける専門領域における学識、哲学と教養のある基礎、制作を含め、プロセス、問題の解決に取り組めるスキルを対応できる人材育成を進めている。

2-3 空間演出デザイン学科における取組上の課題

空間領域や各コースの専門領域での考える力や実演、実習の体制は整っているものの教職に対する教育に関する分野についてはあまり取り扱っていないのが現状であるため、取り組みを深めるための授業や講義を行うことも良いとも考えられる。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

空間演出デザイン学科 ホームページ 研究室サイト

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

絵画基礎（映像メディア表現を含む）（五十嵐）

絵画Ⅱ（津村、五十嵐）

造形総合・彫刻Ⅰ（共通彫塑研究室、彫刻学科研究室）

造形総合・彫刻Ⅱ（共通彫塑研究室、彫刻学科研究室担当）

デザイン基礎Ⅰ（小池、鈴木、津村、大野）

デザイン基礎Ⅱ（池田、五十嵐、ライアン、月岡）

デザイン基礎Ⅲ（太田、津村、天野、開田）

空間演出デザインⅠ（池田、五十嵐、鈴木、天野、小池）

空間演出デザインⅡ（鈴木、太田、小池、片山）

空間演出デザインⅢ（小池、五十嵐、鈴木、津村）

空間演出デザインⅣ（太田、池田、五十嵐、津村）

セノグラフィA～I（池田、太田、小池）

空間1（インテリアデザインA～I）（五十嵐）

ファッションデザインA～I（天野、パトリック、津村）

空間2（環境計画）A～I（鈴木）

3-2 空間演出デザイン学科の長所・特色

各学科共通の文化総合科目と造形総合科目、空間演出デザイン学科の学科科目から成り立っています。

空間の創造、デザイン（演出）する人材の養成、空間を創造、デザイン（演出）することを学ぶ。

1年生の授業ではデザイン基礎Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳに学ぶ空間とテーマに沿った思考の強化、考

え方やプロセス、哲学を身につける。2年生前期に各コースでの選択授業では空間演出デザインⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳで専門領域での選択、感覚や考える柔軟性をアウトプットやドライアンドエラーを繰り返し身につけいく、2年後期はグループの授業では実材実習Ⅰ、Ⅱの照明実習やグループワークを通し社会性で必要なコミュニケーションや人間関係を身につけながら専門性を身につける授業を行い、3年では4コース（セノグラフィ、インテリア、ファッション、環境デザイン）における専門領域における学識、制作を含め、プロセス、問題の解決に取り組み方を学ぶ。

3年後期より各専任のゼミでより専門性を学ぶ。

3-3 空間演出デザイン学科における取組上の課題

現状、教職過程に強く結び付きのある授業はあるもの意識は弱いのではないかと思います。教員間もある程度の内容把握までとも感じております。

より丁寧な把握、理解をするためにも研究室内での共有する機会をより作りたいと考える。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

「武蔵野美術大学 案内2022」54頁 武蔵野美術大学入学センター

武蔵野美術大学ホームページ 空間演出デザイン学科案内

空間演出デザイン学科 ホームページ 研究室サイト

4 上記1から3の項目における空間演出デザイン学科の自己点検・評価を踏まえた総合評価

現状の理解をさらに共有と把握できるような機会をより作りたいと考える。

また、教職履修者の相談や育成により力を入れていくことも視野に入れて知識を深める機会を設ける必要がある。

芸術文化学科

教職課程科目にかかわる専任教員数 6名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 11名

1-1 芸術文化学科における教職課程教育の目的・目標の共有

芸術文化学科では、学科の教職課程担当教員を米徳信一教授が担当して学科全体の調整・確認を行い、教職課程専門委員会委員を春原史寛准教授が担当している。専門委員会における議論や資料については、研究室会議で情報共有している。また、研究室内で『教職課程ガイドブック』を確認し、教職課程の教科に関わる科目を担当する教員が授業運営を行っている。学科内の教職履修者については、ゼミ担当教員や教職課程専門委員会委員担当教員が把握しており、学生の実習時期に対する配慮や、教育実習における学校訪問等を実施している。過去10年の芸術文化学科の教職課程履修者（入学年度の教職登録者）は、平成24年度が44名、平成25年度が40名、平成26年度が40名、平成27年度が42名、平成28年度が49名、平成29年度が47名、平成30年度が48名、令和元年度が44名、令和2年度が31名、令和3年度が49名となっている。教員免許状を取得する学生は、意欲の高い学生となっている。

1-2 芸術文化学科の長所・特色

芸術文化学科は、社会を形成している多様な人々に対して、より深く芸術文化の価値を読み解き、構想し、その価値を知らしめる専門的な人材を育成するという理念のもと、ミュゼオロジー（博物館学）、プランニング（企画）、マネジメント（運営）の三本柱によって、社会と芸術をつなぐ理論と実技を横断的に学んで、見る、聞く、話す、書く、作る、という実践性を総合的に身につけることを教育目標としている。社会を構成する、〈人との〉〈人と場〉〈人と人〉との関係を、芸術文化の力を通してデザインし、一人一人の人間と社会全体の活性化を目指しており、同様の観点を持った教員が教育において活躍できることを目指し、教員養成を実践している。

1-3 芸術文化学科における取組上の課題

生涯学習の場であるミュージアムに関する学問であるミュゼオロジーを重視する芸術文化学科は、博物館学芸員資格を取得する学生も多く、教職課程科目以外にも、ミュゼオロジー入門、ミュゼオロジーと教育など、学校教育と関連する学科専門科目も多数開設しているが、教職課程との関係性の説明などが十分には実施されておらず、学科全体でより質の高い教職課程科目を目指す必要がある。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

武蔵野美術大学入学センター『武蔵野美術大学 大学案内 2022』武蔵野美術大学、2022

年、92-95 頁

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科研究室編『武蔵野美術大学 造形学部 芸術文化学科 学科案内 2022』武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科研究室、2022 年、15 頁"

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（芸術文化学科の現状説明）

入学直後の新入生オリエンテーションでは、教職課程と博物館学芸員課程の説明を行い、さらに学芸員資格との関係性も伝え、新入生に対する意識付けを行っている。また、いくつかの授業で、それぞれの専門的内容を取り扱う中で、教育全般、学校教育についても言及し、教職への多様な関心を養成することを心がけている。さらに、教職課程研究室と連携し、学科専門科目として三澤一実教授による「美術と教育」を開設している。そのようなカリキュラムが、教職課程に対する意欲を継続させることにつながり、卒業研究・制作では学校教育について研究する学生もいる。

2-2 芸術文化学科の長所・特色

教育の現場で活躍する学科の卒業生から、直接実践的に学ぶ機会が多数あるのが芸術文化学科の特徴である。社会で活躍する卒業生の講義を実施する学科専門科目「芸術文化特論Ⅱ」（3 年生必修）では、これまでに中学校教員であり同時に美術批評家としても活躍する神野智彦氏や、中学校・高等学校の学校司書を務める横井麻衣子氏のレクチャーが行われ、学生たちは教育現場での実践的な学科での学修成果の活用について知る機会となっている。また、学科で実践するプロジェクト等に、現役の学校教員が関わる機会もあり、例えば近年では、埼玉県中学校教員の高田悠希子氏（本学科卒業生）が県長期研修教員として学科に滞在し、学生との交流を行っている。

2-3 芸術文化学科における取組上の課題

教材研究・開発につながるような課題や内容は、各授業に多数散見されるが、教職や学校教育そのものがテーマとなることは多くはなく、教科内容に関する授業を体系化して、全体においてどの段階で、教職に関するどのような授業内容や課題の設定を行うべきかを検討する必要がある。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科研究室編『武蔵野美術大学 造形学部 芸術文化学科 学科案内 2022』武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科研究室、2022 年、15 頁

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

教務チームおよび教職課程研究室と確認をしながら、包括的かつ専門的に、必要な科目を設置している。さらに、学年毎に適切に科目を配置して、基礎から応用へと段階的に学習でき

るようにしており、必要な事項を教授するために、学習指導要領や教職課程コアカリキュラムのポイントを意識しながら毎年度シラバスの確認を実施している。また、各科目の担当教員には、十分な経験を有する専門家を充てている。

教科に関する科目と担当者は以下の通りである。

絵画Ⅱ（是枝開）

絵画Ⅲ（是枝開・結城康太郎）

造型総合・彫刻Ⅰ（伊藤誠・富井大裕・杉浦藍・大野綾子・八木貴史・吉雄介）

デザイン基礎（佐々木一晋・杉浦幸子・米徳信一）

映像デザインⅠ（米徳信一）

デジタルデザイン基礎Ⅰ（長内研二・熊谷篤史・米徳信一）

デジタルデザイン基礎Ⅱ（長内研二・熊谷篤史・米徳信一）

展示基礎（佐々木一晋・杉浦幸子）

（ヴィジュアルコミュニケーションデザイン A）（杉浦幸子）

（ヴィジュアルコミュニケーションデザイン B）（田中七星）

（ヴィジュアルコミュニケーションデザイン C）（佐々木一晋）

（映像デザインⅡ）（米徳信一）

（デジタルアーカイヴス）（堀越洋一郎）

編集計画（鈴木紀慶）

イベント計画（樋口光仁）

ウェブデザイン（熊谷篤史）

造形基礎（是枝開・春原史寛・結城康太郎）

工芸制作Ⅰ（大坪圭輔・十時啓悦・大村俊二・西川聡・角文平・神藤修・宗像重幸・藤田恵美・竹田精一郎・中川岳二・藤井常雄・内藤衛）

（アーツプロジェクトⅠ）（是枝開・古賀稔章・佐々木一晋・杉浦幸子・春原史寛・米徳信一）

（美術と教育）（三澤一実）

（造形民俗学Ⅰ）（杉山享司）

（造形民俗学Ⅱ）（杉山享司）

西洋美術史概論（宮崎匠）

（日本美術史概論）（鶴岡明美）

芸術文化学入門（是枝開・古賀稔章・佐々木一晋・杉浦幸子・春原史寛・米徳信一）

芸術文化学概説（是枝開・古賀稔章・佐々木一晋・杉浦幸子・春原史寛・米徳信一）

マネジメント入門（杉浦幸子・村井良子）

美術の理論と歴史と鑑賞（長澤博昭）

（日本美術各論Ⅰ-1）（原浩史）

（日本美術各論Ⅰ-2）（朴亨國）

(西洋美術各論Ⅰ)(北澤洋子)
 (日本美術各論Ⅲ-1)(玉蟲敏子)
 (日本美術各論Ⅲ-2)(鶴岡明美)
 (日本美術各論Ⅳ-1)(明珍素也)
 (日本美術各論Ⅳ-2)(明珍素也)
 (東洋美術各論Ⅱ)(朴亨國)
 (東洋美術各論Ⅲ-1)(朴亨國)
 (東洋美術各論Ⅲ-2)(朴亨國)
 (日本美術史概説Ⅰ-1)(鈴木希帆)
 (日本美術史概説Ⅰ-2)(玉蟲敏子)
 (西洋美術史概説Ⅰ-1)(北澤洋子)
 (西洋美術史概説Ⅰ-2)(北澤洋子)
 (日本美術史概説Ⅲ-1)(玉蟲敏子)
 (日本美術史概説Ⅲ-2)(玉蟲敏子)
 (東洋美術史概説Ⅰ-1)(朴亨國)
 (東洋美術史概説Ⅰ-2)(萩原哉)
 (日本工芸史Ⅰ-1)(木田拓也)
 (日本工芸史Ⅰ-2)(木田拓也)
 (西洋工芸史Ⅰ)(北澤洋子)
 (西洋工芸史Ⅱ)(北澤洋子) "

3-2 芸術文化学科の長所・特色

芸術文化学科では、芸術文化学を实践して「芸術文化と社会をつなぐことにより、社会を活性化する」ミッションを果すために、アートとデザインを基礎的な領域として、ミュゼオロジー、マネジメント、プランニングの3領域を中心に位置づけ、多様な授業において、それらの要素を理論と実技の両面から学べるようカリキュラムが設計されている。「教育」も芸術文化と社会をつなぐ重要な要素と捉えている。

そこでは「見る」「聞く」「読む」「話す」「書く」「つくる」という創造行為の基本的な要素と本質を学び、芸術文化を専門的な観点から読み解き、社会に発信・活用する能力（リテラシー）を育むことを目指している。

1・2年次は芸文の学びの基礎となる力を付ける期間で、3年次は1・2年次の学びをベースにして授業を選び自分自身の学びをデザインする。3年次の後期から6人の専任教員のゼミに分かれて所属し、芸術文化についての専門性を深め、4年次の卒業研究・制作につなげる。実践的な授業である「アーツプロジェクト」では、公共団体等と連携し、児童・生徒に向けたプログラムを実践することもある。また、教職課程研究室と連携し、「美術と教育」（三澤一実教授）を学科の専門科目として開講し、学生の教育に対する知見を深めることに務めて

いる。

本学科の専任教員である、杉浦幸子教授、米徳信一教授は、学外における学校との連携プロジェクトを積極的に実施してきた。また、春原史寛准教授は、前職が群馬大学教育学部教員で教員養成に関わっており、その経験を活用して授業運営等を行っている。

3-3 芸術文化学科における取組上の課題

本学の教職課程の情報は学科内で共有されているが、一方で、教科に関する科目を担当する教員での、学習指導要領や教職課程コアカリキュラムの内容を専門的に深く検討する機会は十分に設けられていない。教職課程研究室との連携を一層深め、教職課程の運営に関する知見を深める機会を意識的に持つ必要があるといえるだろう。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

『教職課程ガイドブック（2022 年度入学生用）』武蔵野美術大学学生支援グループ教務チーム、2022 年、30-31 頁

武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科研究室編『武蔵野美術大学 造形学部 芸術文化学科 学科案内 2022』武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科研究室、2022 年、15 頁

シラバス「美術と教育」

<https://mau.musabi.ac.jp/syllabus2/syllabusReferenceContentsInit.do;jsessionid=qNNzYJ4yaKgZMJYzA7z5y7zH.kmap1?subjectId=225100005029&formatCode=1&rowIndex=0&jikanwariSchoolYear=2022&ksSessionFlag=1&keepScrollTop=0>

シラバス「アーツプロジェクト I」

<https://mau.musabi.ac.jp/syllabus2/syllabusReferenceContentsInit.do;jsessionid=qNNzYJ4yaKgZMJYzA7z5y7zH.kmap1?subjectId=225100008539&formatCode=1&rowIndex=0&jikanwariSchoolYear=2022&ksSessionFlag=1&keepScrollTop=0>

"

4 上記 1 から 3 の項目における芸術文化学科の自己点検・評価を踏まえた総合評価

芸術文化学科では、芸術文化と社会をつなぐという学科のミッションにおいて、教育を重要な領域と捉えており、また、生涯学習の場であるミュージアムに関わる機会が多いという特色から、多数の学生が教職課程に関心を持っている。

その状況に対応すべく、教職課程との連携や、学外の教育機関や教員として活躍する卒業生との関わりを提供している。また、教員養成の動向や学内の教職に関わる共有事項については専任教員の間での情報共有を行っている。しかしながら、より詳細で専門性の高い教職課程への理解は十分ではない部分があり、より緊密な教職課程研究室との連携を模索して、さらなる教育との実践的なつながりを実践していきたい。

通信教育課程

教職課程科目にかかわる専任教員数 33 名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 74 名

1-1 通信教育課程における教職課程教育の目的・目標の共有

通信教育課程では、現在、教職課程専門委員会委員を芸術文化学科の田村裕教授が担当している。教職課程専門委員会での会議の概要や配布資料については、各学科の専任教員への会議報告のメールや、研究室会議などで説明し、情報共有を行っている。また、教科に関する科目を担当する教員に対しては、必要に応じて『教職課程ガイドブック』を配付し、内容を随時確認できる体制を整えている。また、法改正による履修上の変更点など、教職課程への事務連絡に関する情報については、月刊誌『武蔵美通信』を通じて、非常勤講師を含めた情報共有がなされている。

教職課程履修者については、科目担当教員が対象者を把握して、特別な指導を行うことはしていないが、授業や課題に際して履修者からのアドバイスの申し出があれば、内容に応じた指導を適宜行っている。

通信教育課程において、中学校1種（美術）、高等学校1種（美術）、高等学校1種（工芸）の教員免許状の取得が可能な学科は油絵学科と芸術文化学科であり、以下、両学科について順次述べていく。

ここ10年間の油絵学科の教職課程履修登録者は、平成24年度207人、平成25年度191人、平成26年度179人、平成27年度128人、平成28年度120人、平成29年度91人、平成30年度98人、平成31年度（令和元年度）93人、令和2年度97人、令和3年度93人である。

同様に芸術文化学科の教職課程履修登録者は、平成24年度62人、平成25年度56人、平成26年度49人、平成27年度36人、平成28年度27人、平成29年度28人、平成30年度34人、平成31年度（令和元年度）38人、令和2年度38人、令和3年度39人となっている。

通信教育課程の学生は社会人が多く、個々の環境に応じたペースで学習を進めるため、教職課程履修登録者の学習状況には自ずと個人差が生じるが、面接授業や課題制作においてはほとんどの学生が意欲的に取り組んでいる状況が見られる。

1-2 通信教育課程の長所・特色

油絵学科は、「学1課程」の絵画コース、日本画コース、版画コースの3コースあり、「学2課程」では絵画表現コースと日本画表現コースからなっている。絵画コース・絵画表現コースでは油絵を中心に版画や、幅広い絵画表現を選択的に学び追求する。また、伝統的技術から現代の表現まで幅広い知識と教養を身につけながら、これまでのジャンルにとらわれない、新たな可能性をも視野に入れた表現を目指している。日本画コース・日本画表現コース

では日本画の特徴である様々な素材や材料を扱いながら、描画材と表現が密接に結びついていることを学ぶ。また日本画独自の技法を学び、オリジナルな表現に向かうことを目指している。東洋画の伝統を受け継ぎ、風土に根ざした表現世界を築きながら、他の領域を横断的に学ぶことで、新たな表現を生み出し、現代絵画としての日本画の創造性を高めていくことを目的としている。

各コースにおいて表現に必要な学習や知識を育み、制作における方法や手段などを幅広く経験することによって創造性を養うことを通じて教員養成を行っている。

芸術文化学科は「学1課程」の造形研究コース、文化支援コースの2コースあり、「学2課程」では造形研究コース1コースのみである。「学1課程」の造形研究コースと「学2課程」の芸術研究コースでは、アートを文化の所産として知的に理解し探求する対象としてとらえ、アートについて主体的に調べ、考えた成果を他者が理解できるように表現する視点と方法を学ぶことで、真摯な研究者や優れた鑑賞者を育成することを目的としている。また「学1課程」の文化支援コースでは、博物館学を中心に、アートと社会の関係について学び、芸術文化の創造と伝達に関わる人材の育成を目指している。

教育分野においても上記の学びを生かして、アートの世界へ興味を誘い、アートを伝える力を発揮し、活躍してくれることを期待して、教員養成を行っている。"

1-3 通信教育課程における取組上の課題

油絵・芸術文化両学科ともに、教職課程専門委員会での会議の概要や議論の要点などについては、会議報告のメールや研究室会議などを通じて、専任教員間では共有されているが、教科に関する科目を担当する非常勤講師等については共有されていない。非常勤講師なども含めた通信教育課程全体での教職に関する情報共有は十分とは言えない。また、教職課程履修者についても、教員が十分に把握できていない状況にある。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

- ①『造形学部通信教育課程 入学案内 2022』武蔵野美術大学通信教育課程、2021年、22・24・25・30・31頁
- ②『造形学部通信教育課程 入学案内 2021』武蔵野美術大学通信教育課程、2020年、6・14・16・18頁
[芸術文化学科]
- ③『造形学部通信教育課程 入学案内 2022』武蔵野美術大学通信教育課程、2021年、42・43頁
- ④『造形学部通信教育課程 入学案内 2021』武蔵野美術大学通信教育課程、2020年、24・26頁

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（通信教育課程の現状説明）

油絵・芸術文化両学科ともに、入学前の入学相談会、入学後の新入生ガイダンス（新型コロナウイルス感染症対策のため現在は中止。2019 年度まで実施）においては、中学校 1 種（美術）、高等学校 1 種（美術）、高等学校 1 種（工芸）の教員免許状の取得が可能なことや、登録・履修は 2 年次からであることを説明している。また、通常の学生よりも取得すべき単位数が多くなることや、教職に就く強い意志を持って履修するよう呼びかけている。入学時・編入学時には、学生からの請求にしたがって、事務局から『教職課程ガイドブック』を送付している。

通信教育課程では、学科の各年次の全学生が特定日に集合するような場を設けていないため、免許状の取得方法やカリキュラム、登録、教育実習などについての重要な情報や学習のアドバイスなどは『教職課程ガイドブック』『学生ハンドブック』、『履修ガイドブック』、月刊誌『武蔵美通信』などの配布物によって行っている。

また芸術文化学科の場合は、教職課程履修者が課題制作や卒業制作（論文制作）にあたって、自主的に美術教育分野のテーマを選択し、教育に対するポリシーの形成につなげていこうとするケースが多々見られる。担当教員がテーマに応じた指導を行うことで、教職履修の意欲向上につなげている。

2-2 通信教育課程の長所・特色

油絵学科は、「学 1 課程」の絵画コース、日本画コース、版画コースの 3 コースとそれぞれに長所・特色があり、絵画コースは制作の最終目標は自分の「描きたいもの」を絞り具体的な形にして、表現として大切な「描く楽しさ」を知ることによって自身の表現を深めていくことをその目標に置いている。多様な表現と描く楽しさを知り、思考を深め、自分の「描ききたいもの」に向かう。

日本画コースは描画材としての岩絵具、箔、泥、墨、支持体としての和紙、絹、板、漆喰などの素材や材料の密接な結びつきを知り、線描やたらし込みのさまざまな技法を学び、基礎力の充実をはかりやがて自由なテーマでオリジナルな表現を追求する。伝統的な日本画の技法を学び、オリジナルな世界観を表現する。

版画コースは木版、リトグラフ、銅版、スクリーンプリントの 4 版種を学ぶ。4 版種の技法の中から、自分に適した版種による独自の表現を目指している。

「学 2 課程」では絵画表現コースと日本画表現コースとして展開するが上述した絵画コース、日本画コースの長所・特色を踏襲している。造形の基礎を身につけながら、知識、見方・考え方、素材の研究、技術を学び自己表現を追求し表現の確立を目指す。これらは作品を創造する上での造形教育の大きな柱である。造形的な学習を通じて美術教育の根幹をなすものに触れ、造形教育に携わる者の能力と姿勢が養われると考える。

芸術文化学科の「学 1 課程」の造形研究コースと「学 2 課程」の芸術研究コースは、造形に関するテーマを自ら設定し、文献講読やフィールドワークなどによる調査・観察で得た気づきや情報をふまえて考察した成果を他者に言葉で伝える力を育てることに特徴がある。「見

る・聞く・調べる・考える・書く」の学習の基本を押さえた他者とのコミュニケーション能力の向上は、教職を担うべき適切な学生の育成にもつながっている。

また「学 1 課程」の文化支援コースでは、芸術文化を社会に生かす担い手を育成するために、理論的、実践的な研究を進めることに特徴がある。全国各地に在住する学生たちが、地域文化の特性と良さを再認識したり、地域社会の芸術文化資産の活用や、アートを通じた地域文化の活性化の手立てを考えることは、中学・高校の学校教育においても重要であり、実践的に考える力を身につけることは、教職を担う学生の育成にもつながっている。

2-3 通信教育課程における取組上の課題

教科に関する科目のみならず、各学科の専門科目の中にも教育に関連する授業や課題は複数見られる。関連の深い科目については、学習指導書に学習上のアドバイスなどを書き加えていくなどの方策が考えられる。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

[油絵学科]

①『造形学部通信教育課程 入学案内 2022』武蔵野美術大学通信教育課程、2021 年、24・25・30・31 頁

②『造形学部通信教育課程 入学案内 2021』武蔵野美術大学通信教育課程、2020 年、14・16・18 頁

[芸術文化学科]

③『造形学部通信教育課程 入学案内 2022』武蔵野美術大学通信教育課程、2021 年、42・43 頁

④『造形学部通信教育課程 入学案内 2021』武蔵野美術大学通信教育課程、2020 年、6・24・26 頁

⑤『武蔵野美術大学造形学部通信教育課程 2022 年度 履修ガイドブック 学 1 課程』武蔵野美術大学造形学部通信教育課程、2022 年、16 頁

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

通信教育課程では、通信教育課程研究室と通信教育チームおよび教職課程研究室が連携して、必要な科目を設置している。

教科に関する科目は、全学科共通の、広範な学習分野と造形の理論を学ぶ造形文化科目（学 2 課程では文化総合科目）と、造形の基礎や総合力を身につける造形総合科目の授業科目群の中から編成されている。カリキュラムは、各学科の専門性を深める学科別専門科目と同様に、順次性を考慮し、段階的に学習が深まっていくように編成している。また各科目の目的・目標を確実に達成できるよう、毎年、シラバスや学習指導書の点検と更新を行っている。各科目の担当教員には、各分野での優れた専門家を配し、幅広い年齢層と多様な経験を持つ

学生に柔軟に対応しつつ、充実した内容の授業を実施できるよう努めている。

教科に関する科目と担当教員は次のとおりである。

◎学 1 課程

美術論（細井眞子講師）

美術の歴史と鑑賞（大坪圭輔教授、三澤一実教授、金子伸二教授、杉浦幸子教授、松永康講師、林有維講師、齊藤佳代講師）

日本美術史（玉蟲敏子教授、坂本明子講師）

東洋美術史（朴亨國教授、稲葉秀朗講師）

西洋美術史 I（北澤洋子教授、宮崎匠講師）

美術入門（重政啓治教授、三浦明範教授、吉川民仁教授）

西洋美術史 II（北澤洋子教授、楠根圭子講師）

現代芸術論（岡山理香講師）

映像文化論（林司講師）

アートマネジメント（新見隆教授、山出淳也講師）

演劇空間論（荻原剛准教授）

絵画空間論（重政啓治教授、三浦明範教授、小森琢己講師、清水健太郎講師）

美術解剖学（伊藤恵夫講師）

日本画材料学（重政啓治教授、中野めぐみ講師）

デザイン史（木田拓也教授、門田園子講師）

工芸論（玉蟲敏子教授、長岡絵美子講師）

デザイン入門（白尾隆太郎教授、上原幸子教授、清水恒平教授、田村裕教授、金子伸二教授、荻原剛准教授）

色彩学（江森敏夫講師、井上弘介講師）

コミュニケーション論（諸橋泰樹講師）

建築史（足立純子講師）

民芸論（玉蟲敏子教授、杉山享司講師）

印刷文化論（田村裕教授、杉山聡講師）

工業技術概論（荻原剛准教授、近藤嘉男講師）

[造形総合科目]

造形基礎 I（三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、赤塚祐二教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師）

造形基礎 II（三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、赤塚祐二教授、大浦一志教授、

原一史教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、松村繁講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師)

映像メディア表現Ⅰ(白尾隆太郎教授、篠原規行教授、岡川純子講師)

映像メディア表現Ⅱ(白尾隆太郎教授、山内道彦講師)

デッサンⅠ(三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師)

デッサンⅡ(三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師)

絵画研究Ⅰ(三浦明範教授、吉川民仁教授、小尾修教授、阿部英幸講師、伊藤仁講師、大家泰仁講師、小島隆三講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、鈴木敦夫講師、菅原智子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、水野暁講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師)

絵画研究Ⅱ(三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、小尾修教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師)

絵画研究Ⅲ(三浦明範教授、吉川民仁教授、小尾修教授、鈴木敦夫講師、菅原智子講師、米内則子講師)

絵画研究Ⅳ(三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、小尾修教授、石原孟講師、神彌佐子講師、星晃講師、室井佳世講師、和田雄一講師)

絵画Ⅰ(三浦明範教授、吉川民仁教授、阿部英幸講師、伊藤仁講師、大家泰仁講師、小島隆三講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、水野暁講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師)

絵画Ⅱ(三浦明範教授、吉川民仁教授、阿部英幸講師、伊藤仁講師、大家泰仁講師、小島隆三講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、水野暁講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師)

日本画Ⅰ(重政啓治教授、石原孟講師、神彌佐子講師、星晃講師、室井佳世講師、和田雄一講師)

日本画Ⅱ（重政啓治教授、石原孟講師、神彌佐子講師、星晃講師、室井佳世講師、和田雄一講師）

版画Ⅰ（遠藤竜太教授、高浜利也教授、元田久治教授、今井庸介講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小森琢己講師）

版画Ⅱ（遠藤竜太教授、高浜利也教授、元田久治教授、今井庸介講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小森琢己講師）

版画研究Ⅰ（遠藤竜太教授、高浜利也教授、元田久治教授、今井庸介講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小森琢己講師）

版画研究Ⅱ（遠藤竜太教授、高浜利也教授、元田久治教授、今井庸介講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小森琢己講師）

彫刻Ⅰ（戸田裕介教授、山本一弥教授、長谷川さち専任講師）

彫刻Ⅱ（伊藤誠教授、黒川弘毅教授、冨井大裕教授）

彫刻Ⅲ（戸田裕介教授、山本一弥教授、長谷川さち専任講師）

彫刻Ⅳ（伊藤誠教授、黒川弘毅教授、冨井大裕教授）

彫刻Ⅴ（戸田裕介教授、山本一弥教授、長谷川さち専任講師）

造形基礎Ⅲ（白尾隆太郎教授、高崎葉子講師、山本晶講師、木多美紀子講師、野崎麻理講師、野呂麻美講師）

造形基礎Ⅳ（白尾隆太郎教授、富谷智講師、竹中義明講師、生川清孝講師、中澤小智子講師）

デザインⅠ（上原幸子教授、米徳信一教授、小笠原幸介講師、風間純一郎講師、吉田二郎講師）

デザインⅡ（上原幸子教授、米徳信一教授、清水恒平教授、丸田直美講師）

レタリング（白尾隆太郎教授、木村文敏講師）

タイポグラフィ（清水恒平教授、富田真弓講師）

イラストレーション（金子伸二教授、大竹紀美代講師、貞弘和憲講師）

絵本（金子伸二教授、白尾隆太郎教授、吉川民仁教授、野崎麻理講師）

パッケージデザイン（白尾隆太郎教授、福井政弘講師）

ファッションデザイン（白尾隆太郎教授、天野勝教授、中澤小智子講師）

工芸Ⅰ（白尾隆太郎教授、荻原剛准教授、伊東茂講師）

工芸Ⅱ（白尾隆太郎教授、荻原剛准教授、野田昇一郎講師、宗像重幸講師）

ブックバイディング（田村裕教授、近藤理恵講師）

図法製図Ⅰ（上原幸子教授、荻原剛准教授、柴田克哉講師、富谷智講師）

図法製図Ⅱ（上原幸子教授、荻原剛准教授、柴田克哉講師、山本博一講師）

デザインリサーチⅠ（田村裕教授、金子伸二教授、小池利佳講師、白井新太郎講師）

デザインリサーチⅡ（田村裕教授、金子伸二教授、中尾早苗講師）

◎学 2 課程

〔文化総合科目〕

※学 1 課程〔造形文化科目〕と同様

〔造形総合科目〕

造形基礎 I（三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、赤塚祐二教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師）

造形基礎 IIA（三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、赤塚祐二教授、大浦一志教授、原一史教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、松村繁講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師）

造形基礎 IIB（三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、赤塚祐二教授、大浦一志教授、原一史教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、松村繁講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師）

映像メディア表現 I（白尾隆太郎教授、篠原規行教授、岡川純子講師）

映像メディア表現 II（白尾隆太郎教授、山内道彦講師）

デッサン A（三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、松村繁講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師）

デッサン B（三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、松村繁講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師）

デッサン表現（三浦明範教授、重政啓治教授、吉川民仁教授、阿部英幸講師、石原孟講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、神彌佐子講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、星晃講師、松村繁講師、水野暁講師、室井佳世講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師、和田雄一講師）

絵画研究 IA（三浦明範教授、吉川民仁教授、小尾修教授、阿部英幸講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、水野暁講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師）

絵画研究 IB（三浦明範教授、吉川民仁教授、小尾修教授、鈴木敦夫講師、菅原智子講師、米内則子講師）

絵画研究 IIA（三浦明範教授、吉川民仁教授、阿部英幸講師、伊藤仁講師、今井庸介講師、大家泰仁講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小島隆三講師、小森琢己講師、坂本龍幸講師、清水健太郎講師、関口雅文講師、畠山昌子講師、水野暁講師、山田淳吉講師、山本晶講師、渡辺えつこ講師）

絵画研究 IIB（三浦明範教授、吉川民仁教授、小尾修教授）

絵画研究 III（三浦明範教授、吉川民仁教授、小尾修教授、鈴木敦夫講師、菅原智子講師、米内則子講師）

版表現 I（三浦明範教授、吉川民仁教授、遠藤竜太教授、高浜利也教授、元田久治教授、今井庸介講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小森琢己講師）

版表現 II（三浦明範教授、吉川民仁教授、遠藤竜太教授、高浜利也教授、元田久治教授、今井庸介講師、木村繁之講師、木村真由美講師、小森琢己講師）

彫刻 I（戸田裕介教授、山本一弥教授、長谷川さち専任講師）

彫刻 II（伊藤誠教授、黒川弘毅教授、冨井大裕教授）

彫刻 III（戸田裕介教授、山本一弥教授、長谷川さち専任講師）

彫刻 IV（伊藤誠教授、黒川弘毅教授、冨井大裕教授）

彫刻 V（戸田裕介教授、山本一弥教授、長谷川さち専任講師）

造形基礎 IIIA（白尾隆太郎教授、高崎葉子講師、山本晶講師、木多美紀子講師、野崎麻理講師、野呂麻美講師）

造形基礎 IIIB（白尾隆太郎教授、高崎葉子講師、山本晶講師、木多美紀子講師、野崎麻理講師）

造形基礎 IV（白尾隆太郎教授、富谷智講師、竹中義明講師、生川清孝講師、中澤小智子講師）

デザイン I（上原幸子教授、米徳信一教授、小笠原幸介講師、風間純一郎講師、吉田二郎講師）

デザイン II（上原幸子教授、米徳信一教授、清水恒平教授、丸田直美講師）

レタリング（白尾隆太郎教授、木村文敏講師）

タイポグラフィ（清水恒平教授、富田真弓講師）

イラストレーション（金子伸二教授、大竹紀美代講師、貞弘和憲講師）

絵本（金子伸二教授、白尾隆太郎教授、吉川民仁教授、野崎麻理講師）

パッケージデザイン（白尾隆太郎教授、福井政弘講師）

ファッションデザイン（白尾隆太郎教授、天野勝教授、中澤小智子講師）

工芸Ⅰ（白尾隆太郎教授、荻原剛准教授、伊東茂講師）

工芸Ⅱ（白尾隆太郎教授、荻原剛准教授、野田昇一郎講師、宗像重幸講師）

ブックバインディング（田村裕教授、近藤理恵講師）

図法製図Ⅰ（上原幸子教授、荻原剛准教授、柴田克哉講師、富谷智講師）

図法製図Ⅱ（上原幸子教授、荻原剛准教授、柴田克哉講師、山本博一講師）

3-2 通信教育課程の長所・特色

油絵学科におけるカリキュラム構成の特色は次のとおりである。

学1課程・学2課程の絵画コース・絵画表現コースの特徴は、それぞれに適した表現を見出せるように科目を設定している。初学の者には造形の本質を知り基礎力を養うための科目も設けている。必修科目では、絵画の表現に必要な知識を身につける学習を進め、選択必修科目と造形総合科目には表現ごとに適した素材や技術、媒体と手段を学ぶことができる科目を設定している。

学1課程・学2課程の日本画コース・日本画表現コースの特徴は基礎・応用に教養を加えた科目構成になっている。初めに用具用材を揃え扱うことから出発し、日本画を描く上で必要な技法を習得したのち、自身の望む手法を追求する科目へと、基礎から応用への段階に学習を進める。コース専門科目である必修科目や日本画関連科目に加え、絵画表現コースの学科別専門科目を必要に応じて選択でき、教養面も含めた自主的な学習を組み立てながら履修することができる。これらからの科目を自由に選択し、それぞれが求める表現に結びつける。個々がオリジナルな世界観へとつなげられる科目が用意されている。

芸術文化学科におけるカリキュラム構成の特色は次のとおりである。

学1課程の造形研究コースの特色は、造形芸術を深く理解し、それを自分の言葉で表現できる人材を育てることを目的として、造形史、造形論、媒体研究の3つの柱によって構成していることである。

また学1課程の文化支援コースの特色は、様々な立場から芸術文化の創造を支援し、その伝達を担う人材の育成を目的として、博物館学を中心とした「ミュゼオロジー」を軸に、「生涯学習論」「地域文化研究」の3つの柱によって構成していることである。

さらに学2課程の芸術研究コースのカリキュラムの特色は、造形を中心に芸術文化を研究するための知識と能力を養うことを目的として、①芸術研究の理論を学ぶ科目、②研究の方法論を学ぶ科目、③特定テーマによるゼミ形式の科目、④卒業制作に関する科目の4つの柱からなる「必修科目」と、博物館に関する科目の「選択必修科目」で構成していることである。必修科目は通信授業とメディア授業で構成されており、大半を後者が占めている。そのため動画視聴や課題の作成、Web上への課題データアップと共有化、教員・学生相互の意見交換などを通じて、教職課程履修生に必要なICT機器を使いこなす基本スキルを自ずと身につけることになる。

3-3 通信教育課程における取組上の課題

教科に関する科目は、全学科共通の造形文化科目（文化総合科目）と造形総合科目の科目群から選定・編成され、各担当教員によって充実した内容の授業が実施できており、特に改善を要する課題は見られない。今後いっそう通信教育課程研究室と通信教育チーム、教職課程研究室の3者が連携して、教職課程運営を行っていききたい。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

〔油絵学科〕

①『造形学部通信教育課程 入学案内 2021』武蔵野美術大学通信教育課程、2020 年、14～17 頁

②『造形学部通信教育課程 入学案内 2022』武蔵野美術大学通信教育課程、2021 年、24・25・30・31・34 頁

〔芸術文化学科〕

③『造形学部通信教育課程 入学案内 2021』武蔵野美術大学通信教育課程、2020 年、24・26 頁

④『造形学部通信教育課程 入学案内 2022』武蔵野美術大学通信教育課程、2021 年、13・43・46 頁

4 上記1から3の項目における通信教育課程の自己点検・評価を踏まえた総合評価

教員養成に関する動向や学内における教職関連の共有事項については、教職課程専門委員を通じて、通信教育課程全学科の専任教員間で共有できている。ただし教科に関する科目を担当する非常勤講師をも含めた全教員間の共有は十分とは言えない。

教職課程履修者については、科目担当教員が対象者を把握して、特別な指導を行うことはしていないが、履修者からの授業内容や課題に関するアドバイスの申し出に応じて指導を行い、教職履修の意欲向上につなげている。教科に関する科目に限らず、学科別専門科目においても教育と関連の深い科目については、教員養成につながるような充実した内容の授業を実施できるよう努めていく必要がある。

また、今後いっそう教職課程研究室との連携を密にし、通信教育課程研究室と通信教育チーム、教職課程研究室の3者が一体となって教職課程運営を行っていききたい。

教職課程研究室

教職課程科目にかかわる専任教員数 4名

教職課程科目にかかわる非常勤講師数 9名

1-1 各学科における教職課程教育の目的・目標の共有

武蔵野美術大学は、教員の養成の目標として、造形学部全体、通学課程各学科、通信教育課程のアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを踏まえ、建学の精神である「教養を有する美術家養成」を基盤として、自らが「真に人間的自由に達するような美術教育」を担う主体としての美術科教員、工芸科教員を養成することを目標としている。

このため、教育職員免許法による中学校の美術科、高等学校の美術科、工芸科の免許状を授与するための教育課程を整備するとともに、さらに学校における造形教育を担うための実践的な指導力と教員としての幅広い教養をもつ人材の養成を進めている。"

1-2 各学科の長所・特色

各学科の教職課程を束ねる教職課程研究室は、美術を総合的な人間形成をもって成るものとする大学の教育理念に基づき、次の教育目標を掲げる。

1.幅広い教養を備え、人格的にも優れた美術・デザインを中心とする造形各分野の専門家を養成する。

2.美術とデザインの領域における総合的な造形教育を通じて、広く知識を授けるとともに、深く専門の技能、理論や応用を教授研究し、豊かな美的教養をそなえた社会人を育成する。こうした人材の輩出をもって、日本と世界の文化の創造発展と社会に貢献することを、武蔵野美術大学の使命とし、この目標の達成のために貢献すべく教職課程研究室も努力している。

1-3 各学科における取組上の課題

武蔵野美術大学の教員養成に大きくかかわる教職課程研究室において、本来であれば、各学科の教員養成の状況をきちんと把握していることが望まれるが、とくに各学科の教科に関する科目が実際にどのように運営されているのか、必ずしも把握しきれていない。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

①武蔵野美術大学「武蔵野美術大学教職課程の概要（第8年報）」2022(令和4)年4月1日現在、https://www.musabi.ac.jp/wp-content/uploads/2022/04/tc_info_2022.pdf

2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（各学科の現状説明）

■教職課程受講者人数

教職課程の受講が可能な者は、通学課程では課程認定を受けた造形学部 8 学科と大学院造形研究科 2 専攻の 1 年次の学生と、同卒業生の科目等履修生である。通信教育課程では、造形学部 4 学科の 2 年次以上で、取得単位数等の条件を満たした学生が受講可能となり、さらに本学卒業生や現職教員を科目等履修生で受け入れている。

○通学課程 2021(令和 3)年 5 月 1 日現在

(通学課程) 課程認定学科専攻		登録者数					免許教科別人数			
							中学	高等学校		
		1年	2年	3年	4年	小計	美術	美術	工芸	情報
造形学部	日本画学科	6	10	7	11	44	44	44	5	-
	油絵学科油絵専攻	25	21	15	28	89	89	89	11	-
	油絵学科版画専攻	3	2	1	4	10	10	10	2	-
	彫刻学科	3	9	5	10	27	27	27	10	-
	視覚伝達デザイン学科	4	6	4	5	19	19	19	4	-
	工芸工業デザイン学科	16	6	14	13	49	49	49	22	-
	空間演出デザイン学科	11	9	12	9	41	41	41	9	-
	芸術文化学科	18	11	8	12	49	49	49	11	-
	デザイン情報学科	-	-	-	2	2	-	-	-	2
	科目等履修生	3				3	3	3	2	-
造形学部小計		86	74	66	93	333	331	331	76	2
大学院	美術専攻	5	7	-	-	12	12	12	2	-
	デザイン専攻	1	0	-	-	1	1	1	0	-
	大学院小計	6	7	-	-	13	13	13	2	-
合計		72	81	66	93	346	344	344	78	-

履修登録については、デザイン情報学科は高等学校情報免のみ、他学科は中学校と高等学校の美術免を基本として、希望により工芸免を加えて登録している。

○通信教育課程 2021(令和 3)年 5 月 1 日現在

(通信教育課程)			登録者数					免許教科				
								中学	高等学校			
課程認定学科			1年	2年	3年	4年	小計	美術	美術	工芸	(情報)	
造形学部	油絵学科		—	32	24	37	93	77	84	18	(4)	
	工芸工業デザイン学科		—	5	2	9	16	13	14	8	(0)	
	芸術文化学科		—	3	9	27	39	32	33	15	(1)	
	デザイン情報学科		—	9	5	12	26	16	19	12	(10)	
	科目等	卒業生特例						52	43	44	19	(3)
	履修生	教職生						79	58	38	27	(3)
	造形学部小計		—	49	40	85	305	239	232	99	(21)	

通信教育課程の教職課程履修登録は 2 年次より。卒業生特例は本学造形学部(通学課程を含む)の卒業生について、教職生は現職の学校教員で校長等の推薦のある者について、教員免許状の取得を目的として履修する者である。

■免許状授与件数

通学課程の免許状は、大学を通じて免許状授与権者である東京都教育委員会に卒業修了年次に教育職員免許法施行規則別表1の科目について「一括申請」を行うために正確な数値がわかる。これに対して、各都道府県教育委員会に学生が「個別申請」を行うことが一般的な通信教育課程では、実数の把握が困難となっている。

○通学課程

(1) 2021(令和3)年度卒業者

(通学課程) 課程認定学科専攻		授与者数	免許取得者数(免許状種別ごとに表示)			
			高等学校			中学校
			美術	工芸	情報	美術
造形学部	日本画学科	10	10	1	－	10
	油絵学科	30	30	4	－	30
	彫刻学科	9	9	4	－	9
	視覚伝達デザイン学科	5	5	0	－	5
	工芸工業デザイン学科	11	11	8	－	11
	空間演出デザイン学科	8	8	3	－	8
	芸術文化学科	10	10	2	－	10
	デザイン情報学科	0	－	－	0	－
	科目等履修生	3	3	2	－	3
	造形学部小計	86	86	24	0	86
大学院	美術専攻	8	8	1	－	8
	デザイン専攻	0	0	0	－	0
	大学院小計	8	8	1	－	8
大学合計		94	94	25	0	94

○通信教育課程「別表1」の一括申請

卒業生特例は本学造形学部(通学課程を含む)の卒業者について、教職生は現職の学校教員で校長等の推薦のある者について、教員免許状の取得を目的として履修する科目等履修生である。通信教育課程の特徴として、卒業段階で免許状授与権者である東京都教育委員会に大学を通じて「別表1」について申請を行う「一括申請」の割合が低くなる。編入学者や科目等履修生など様々な時期に居住地の道府県教育委員会に行ったり、「別表3」「別表4」「別表8」により既修得免許状などを前提に申請する「個別申請」の比重が高くなる。この「個別申請」では、大学は証明書の発行等々を行うが、授与権者からの免許状の授与の仲立ちを行わないため、最終的な免許状授与件数の把握が難しいのが実態である。

(1) 2021(令和 3)年度通信教育課程卒業者のうち一括申請者

(通信教育課程) 課程認定学科		授与者数	免許教科			
			中学	高等学校		
			美術	美術	工芸	情報
造形学部	油絵学科	9	3	4	1	1
	工芸工業デザイン学科					
	芸術文化学科					
	デザイン情報学科	4	1	2	1	
	造形学部小計	13	4	6	2	1

■就職状況（東京都教員選考合格者実績）

東京都教育委員会の公立学校教員選考についての採用実績を記載する。東京都の美術教員の採用では、小学校図画工作科専科教員と中学校美術科、中学校美術科と高等学校美術科をあわせて実施されている。「名簿登載者」は教諭としての合格者、「期限付」は期限付名簿登載者として1年間の講師の合格者をさし、これらのデータには他の時期の選考試験や講師等の個別の採用を含まない。

採用年度 (実施は前年)	小・中学校		中・高等学校		特別支援学校		合計		
	名簿登載者	期限付	名簿登載者	期限付	名簿登載者	期限付	名簿登載者	期限付	合計
2018(平成30) 年度	5 (2)	2 (0)	2 (1)	6 (1)	0 (0)	0 (0)	7 (3)	10 (2)	17 (5)
2019(平成31) 年度	9 (0)	2 (0)	10 (4)	3 (0)	1 (0)	1 (1)	19 (6)	6 (0)	25 (6)
2020(令和2) 年度	9 (2)	4 (1)	4 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	13 (3)	5 (1)	18 (4)
2021(令和3) 年度	9 (2)	4 (1)	4 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (0)	13 (3)	5 (1)	18 (4)
2022(令和4) 年度	8 (0)	2 (1)	7 (2)	4 (2)	0 (0)	0 (0)	15 (2)	6 (3)	21 (5)

() 内は卒業見込み

2-2 各学科の長所・特色

■免許状更新講習実施

本学は、教育職員免許法にもとづく免許状更新講習について文部科学省による試行段階から参加して、実施初年度から実施している。通信講習の教材には、必修領域では公益財団法人私立大学通信教育協会編による『教育事情 第3版』（2016年度より必修領域と選択必修領域を『新しい教育事情』に更新）を使用し、選択必修領域では選択したクラスにより『造

形ワークショップ入門』（武蔵野美術大学出版局 2015 年）か『新しい教育相談論』（武蔵野美術大学出版局 2016 年）、選択領域では『美術教育の動向』（武蔵野美術大学出版局 2009 年）を用いている。対面講習では、必修領域と選択必修領域は講義形式、選択領域は美術の各分野の工房での実習と学習指導に関するゼミによる。なお、文部科学省からの通知により免許状更新講習の「発展的解消」の見込みが伝えられたので、廃止となる見込みの 2022(令和 4)年度の免許状更新講習の開設は予定していない。

形式で実施しています。	必修領域				選択領域			
	登録者数			修了認定試験 合格者数	登録者数			修了認定試験 合格者数
	通信 講習	対面 講習	計		通信 講習	対面 講習	計	
2017(平成29)年度	67	117	184	182	60	130	190	184
2018(平成30)年度	75	132	207	195	73	134	207	196
2019(平成31)年度	71	125	196	183	60	136	196	182
2020(令和2)年度	100	中止	100	87	100	中止	100	90
2021(令和3)年度	173	中止	173	154	173	中止	173	153

2-3 各学科における取組上の課題

教員採用試験の受験状況や合格状況に関して、東京都については把握できているが、それ以外の地域については十分に把握できていない。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

①武蔵野美術大学「武蔵野美術大学教職課程の概要（第 8 年報）」2022(令和 4)年 4 月 1 日現在、https://www.musabi.ac.jp/wp-content/uploads/2022/04/tc_info_2022.pdf

3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

■教員の養成に係る組織及び教員の数

武蔵野美術大学では、造形学部に通学課程と通信教育課程、大学院を円滑に運営するために、4 人の専任教員を中心とした教職課程研究室を組織している。また教職課程の教育をサポートするために教職課程資料閲覧室を開設している。教職課程全体の運営は、学則等に基づいて造形学部教授会、教務学生生活委員会、通信教育課程教務委員会を組織して、教職課程履修登録、介護等体験、教育実習などの議案として扱っている。さらに教職実践演習や免許状更新講習では別個に判定会議を置いている。

○教職課程に関する専任教員数（2019(平成 31)年度の再課程認定による新課程）

令和4年4月1日現在		通学課程								通信教育課程											
		教科に関する科目								教職に関する科目		教科に関する科目								教職に関する科目	
												中美		高美		高工		高情			
		必	実	必	実	必	実	必	実	必	実	必	実	必	実	必	実	必	実		
造形学部	日本画学科	3	5	3	5	3	5			2	4									2	2
	油絵学科	3	14	3	14	3	7					3	8	3	8	3	3				
	彫刻学科	3	5	3	5	3	5														
	視覚伝達デザイン学科	3	11	3	11	3	11														
	工芸工業デザイン学科	3	11	3	11	3	10														
	空間演出デザイン学科	3	8	3	8	3	8														
	芸術文化学科	3	8	3	8	3	8					3	5	3	5	3	4				
	デザイン情報学科							*	*									*	*		

* デザイン情報学科の「高情」（高等学校情報科の一種免許状）は、再課程認定を行わなかったため、2019(平成 31)年度からは新課程はなく、旧課程（2 年次以上在学者等）のみである。

「中美」「高美」「高工」「高情」は、中学校美術、高等学校美術、高等学校工芸、高等学校情報科の一種免許状。「必」「実」は教育課程認定基準に基づく専任教員の必要数と実際数。実際数は 2019(平成 31)年度実施の新課程の教育課程に関する文部科学省への申請事項の数値による。なお、大学設置基準等に基づく必要専任教員数や実際数は、これよりも大きな人数となっている。

3-2 各学科の長所・特色

武蔵野美術大学は、教育職員免許法施行規則等に定める授業科目の充実に努めるほか、大学独自の質向上の取組として次の取組を実施している。

■大学独自教科書の発行

通信教育課程における教職課程の教科書として多くの教科書を刊行して、また同書を通学課程の教科書としても活用することにより、授業及び授業前後の学生による学習に効果을 上げている。常に新しい教育動向を反映するため、2022 年度は特別活動論の教科書の改訂をおこなった。

編著者	書名	刊行年月	出版社	通信教育課程該当科目
高橋陽一	チーム学校の教師論	2021年4月	武蔵野美術 大学出版局	教師論
高橋陽一著	新しい教育通義	2018年3月	武蔵野美術 大学出版局	教育原理Ⅰ・Ⅱ
三澤一実監修	美術教育の題材開発	2014年4月	武蔵野美術 大学出版局	教育方法、美術教育法Ⅰ・Ⅱ Ⅰ・Ⅳ、工芸教育法Ⅱ
大坪圭輔著	美術教育資料研究	2014年4月	武蔵野美術 大学出版局	美術教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、 工芸教育法Ⅰ
大坪圭輔著	工芸の教育	2017年4月	武蔵野美術 大学出版局	工芸教育法Ⅰ
高橋陽一著	新版 道德教育講義	2012年4月	武蔵野美術 大学出版局	道德教育の理論と実践
高橋陽一・伊東毅著	道德科教育講義	2017年4月	武蔵野美術 大学出版局	道德教育の理論と実践
伊東毅著	未来の教師と考える 特別活動論	2022年4月	武蔵野美術 大学出版局	特別活動の理論と実践
高橋陽一・伊東毅編	新しい生活指導と進 路指導	2013年4月	武蔵野美術 大学出版局	生活指導の理論と実践
高橋陽一・伊東毅編	新しい教育相談論	2016年4月	武蔵野美術 大学出版局	教育相談論
大坪圭輔・三澤一実編	美術教育の動向	2009年4月	武蔵野美術 大学出版局	美術の歴史と鑑賞、教職実 践演習
高橋陽一編	造形ワークショップ 入門	2015年4月	武蔵野美術 大学出版局	ワークショップ研究Ⅰ・Ⅱ
高橋陽一編	特別支援教育とアート	2018年3月	武蔵野美術 大学出版局	新課程「特別支援教育」
高橋陽一編	総合学習とアート	2019年4月	武蔵野美術 大学出版局	新課程「総合的な学習の時 間の指導法」
大坪圭輔編	求められる美術教育	2020年3月	武蔵野美術 大学出版局	教職実践演習（中・高） 美術の歴史と鑑賞
三澤一実編	美術の授業のつくり かた	2020年3月	武蔵野美術 大学出版局	教育方法 美術教育法Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ 教職実践演習（中・高）
高橋陽一・伊東毅編	これからの生活指導 と進路指導	2020年3月	武蔵野美術 大学出版局	生活指導の理論と方法

■美術と福祉プログラム

1998(平成 10)年度より開始された「美術と福祉プログラム」は、教職課程履修者に適用される介護等体験法にもとづく本学独自の取組である。2006(平成 18)年度には文部科学省より「特色ある大学教育支援プログラム」(特色 GP) に選定された。2015(平成 27)年度は、教職課程 2 年次の必修科目(情報免を除く)として「美術と福祉」(通年 2 単位演習科目、教科又は教職に関する科目に該当、7 クラス開講)をゼミ形式で開設している。運営は小平市内の 6 つの社会福祉施設と提携して外部評価委員会を置いて実施している。教職課程研究室の高橋陽一教授が全体を担当して、各クラスは、杉山貴洋講師、川本雅子講師、田中千賀子講師、有福一昭講師、細野泰久講師が担当している。

2019(平成 31)年度からの再課程認定による新課程においては、前期 2 単位科目「総合的な学習の時間の指導法」と後期 2 単位科目「特別支援教育」として実施し、これらの授業のなかでコアカリキュラム等に指定する必要な理論と実践を学びながら、さらに「美術と福祉プログラム」の内容を含み込むことで高度に実践的な授業内容を展開する。また、通学と通信を通じて、『特別支援教育とアート』と『総合学習とアート』の二つの教科書を刊行した。

■造形ファシリテーション能力獲得プログラム

造形ファシリテーション能力獲得プログラムは、全学科の学生を対象にして、教職課程研究室を中心に造形学部全体が連携して実施しており、造形ワークショップを支える能力としての造形ファシリテーション能力を獲得するための取組である。「造形ファシリテーション能力獲得プログラム — 造形ワークショップの記録と表現による学士力の形成」として 2009(平成 21)年には文部科学省より「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラム(テーマ A) に選定された。現在は高橋陽一担当「ワークショップ実践研究Ⅰ」、三澤一実・齋藤啓子担当「ワークショップ実践研究Ⅱ」(各半期 2 単位)として開講している。

■旅するムサビ・ムサビる

旅するムサビ・ムサビるは、教職課程研究室の三澤一実の指導で、教職課程履修学生を中心に学生 主体の課外活動として、小中学校や地域団体と連携して行われる美術教育の活動である。図画工作科・美術科の教員と連携して、造形ワークショップ、児童生徒参加の展示活動、黒板ジャック、公開制作 などの様々な取組が行われている。

■学校ボランティア・インターンシップ

武蔵野美術大学教職課程研究室は、近隣小中学校を中心に積極的に学生が学校現場に関わるボランティア活動の機会の提供に努めている。一般大学と異なって実技授業時数の多い美術大学の特性から通常の授業期間での学校ボランティア・インターンシップには困難があるため、授業がない期間に計画的に送り出す活動として位置づけている。2022(令和 4)年春で第 11 期を迎えた「上砂川むさびプロジェクト」(立川市立上砂川小学校との連携)や小平市立中学校での学校ボランティア活動を展開している。

■研究室雑誌『造形と教育』の刊行

大学院での教員養成の取組として、大学院ゼミ「教育学研究」において大学院学生による調

査研究の成果発表の場として『造形と教育』ISSN2187-5376 を発行している。専修免許状課程の修士課程学生のみならず、博士後期課程学生や教職員による造形教育の報告のメディアとして定着している。2022(令和4)年1月に第16号を刊行した。

3-3 各学科における取組上の課題

教職課程研究室の取り組みは上記のように豊富であるが、特定の教員に負担が偏っている傾向がある。これ以上、偏りが生じないように共同体制を合理的につくっていく必要がある。

上記項目群の根拠となる資料やデータ名

- "①『美術と福祉プログラム報告書』2006年度～2008年度
②高橋陽一『美術と福祉とワークショップ』武蔵野美術大学出版局、2009年
③高橋陽一編『特別支援教育とアート』武蔵野美術大学出版局、2018年
④高橋陽一編『総合学習とアート』武蔵野美術大学出版局、2019年
⑤『造形ファシリテーション能力獲得プログラム報告書』2009年度～2011年度
⑥高橋陽一『造形ワークショップを支える』武蔵野美術大学出版局、2012年
⑦高橋陽一『ファシリテーションの技法』武蔵野美術大学出版局、2019年
⑧美術と福祉プログラムウェブページ www.musabi.ac.jp/gp/
⑨造形ファシリテーション能力獲得プログラムウェブページ www.musabi.ac.jp/gp/
⑩大学公式ページ www.musabi.ac.jp/collaboration/spread/tabimusa_project 学生参加による公開ページ tabimusa.exblog.jp"

4 上記1から3の項目における各学科の自己点検・評価を踏まえた総合評価

教職課程研究室での取り組みは蓄積もあり、安定したものになっている。そして、その内容は豊富で多岐にわたっている。学生が積極的に取り組めば、優れた教員になっていくと思われる。しかし、こうした教職課程研究室の取り組みに参加する学生は限られている。多くの学生が、こうした取り組みに参加してくれるような工夫が必要である。また、こうした取り組みは教員の負担にもなるが、一部の教員に偏りすぎないようにバランスをとる必要もある。

総括

教職課程自己点検評価報告書の作成にかかわられた方々にまずは感謝申し上げたい。ここでは、作成いただいた報告書全体に目を通したところで感じたところを項目別にいくつか述べてみたい。

「1 教職課程にかかわる教職員の共通理解に基づく共同的な取り組み」について

「1-1 各学科における教職課程教育の目的・目標の共有（現状説明）」として、各学科（油絵学科は各専攻）及び通信教育課程（以下「各学科等」という。）の教職に関する情報共有の様子を記していただいた。教職課程専門委員会に参加する委員によって、しっかりと情報が伝達され、必要があれば議論されていることがわかった。教職課程専門委員会を中心とする学内組織がしっかりと機能していることを確認できた。

ただし、多くの学科等では、情報共有が専任教員でとどまり、非常勤講師にまでは十分な伝達がなされていないこともわかった。

「1-2 各学科の長所・特色」として、各学科等ではそれぞれのディプロマ・ポリシー（修得を期待する能力の育成方針）と重ねるような形で、各学科等で目指す教員の資質・能力を記していただいた。もちろん各学科等特有の、ものを描いたりつくったりする上での長所が描かれているが、加えて「精神性」「哲学的な問」「コミュニケーション」「〈人と人〉との関係」といった文言が見られるなど、人間の内面や人間関係にも重きを置いて教育が行われていることもわかった。

「1-3 各学科における取組上の課題」として、各学科等での課題について記していただいた。非常勤講師との共有が十分でないことが多くの学科等から伝えられた。実際には多くの非常勤講師が教職と関係する科目を担当していることを考えるならば、この辺りは今後の改善が必要とされるところだと思われる。また、教職履修者の把握にも問題があるとの認識が複数の学科等から報告された。こうしたことに対して、教職に関する非常勤講師を含む拡大研究室会議開催の必要性などをご提案いただいた学科等もある。こうした提案を多くの学科等で共有していただけたらと思う。

「2. 学生の確保・育成・キャリア支援」について

「2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成について（各学科の現状説明）」では、各学科等での教職履修についてのガイダンスの様子等を中心に記していただいた。多くの学科等では、入学直後の学科等のオリエンテーションで教員免許が当学科等で取得できることをしっかりと伝えていただいているようである。中には、学生募集時の入学相談会やオープンキャンパスでも教員免許が取得できることをアピールしてくださっているところもある。また、そうした際に、当学科等を出て教員として活躍している実例を紹介してくださっているところもあった。

また、どの学科等も、教職を履修した場合のたいへんさも同時に伝えていただいている。多くの学科等が安易な履修をしないように注意をしてくださっているようである。

「2-2 各学科の長所・特色」として、すべての学科等が専門のスキルの育成に力を入れていることが報告されている。これに加え、多様性や社会性を重視したり、自主性を強調する学科等も多く、技術を習得させることのみではなく人間性の育成という点を大切にしているところも本学全体に共通する重要な特徴であることが確認できた。また、プロジェクトの中に現役の学校教員の加わってもらったりしながら教職を実践的に学んでいる学科等があったり、また、子どもを対象にしたデザインに取り組む授業などを用意し、子ども理解の促進に努めている学科等などもあった。教職につながる取り組みが予想以上に多かったことをこの点検作業で知ることができた。

「2-3 各学科における取組上の課題」として、教職につながる取り組みはそれなりにあるが、それらが教職を意識した取り組みになっているわけではないことが多くの学科等から報告された。これを受けて、小中高の図画工作や美術や工芸の授業を意識した取り組み、小中高の授業で使える教材の開発、小中高との積極的な連携といったものを積極的に検討しようという姿勢が複数の学科等で見られた。

「3. 適切な教職課程カリキュラム」について

「3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施」として、多くの学科等から教務チームや教職課程研究室との連携の下で慎重に教職に関するカリキュラムの編成・実施・維持が行われているという報告があった。また、同時に教職に関わる授業の担当者には十分な経験を有する専門家を充てているという各学科等の自負が感じられる報告もあった。教職にかかわる科目の担当者を今回記載していただいたが、各学科等であいまいになっていたことを確認してもらったいい機会になったように思われる。相当数の教員が教職に関わっていることを認識してもらえたと思う。

「3-2 各学科の長所・特色」として、各学科等ではそれぞれのカリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）と重ねるような形で、とくに教職と関係するところに焦点を当てて記していただいた。各学科等が力を入れて養成している専門的な能力を端的に知ることができた。得意分野をもつことは教員にとっても重要なことであるので大切にしていた点である。いくつかの学科等で教職課程研究室と積極的に連携して授業づくりが進められていることも報告されている。こうした試みが継続し、根付いていくことを期待したい。

「3-3 各学科における取組上の課題」として、関係科目担当者が学習指導要領や同解説を十分に意識して授業をしているわけではないことが、多くの学科等から報告された。ましてや、教職課程コアカリキュラムはほとんど意識されていない状態である。小中高の学校教育とのかかわりがほとんどない学科等も見られる。こうした状況を改善していく必要がある。

おわりに

「教養を有する美術家養成」「真に人間的自由に達するような美術教育」を建学の精神とする武蔵野美術大学は、専門のみに偏らない包括的な資質・能力の育成には高い評価を受けている。しかし、このことは専門的な資質・能力が低いことを意味するのではない。各学科等の報告からもわかるように、専門的な資質・能力の育成に大きな自信を持っている。一般的・包括的能力にも、専門的能力にも長けた美術家を養成しようとする本学の方針は、教員養成の目指すところと軌を一にする。

本学のこの長所を教員養成においても関係者が意識して、連携を強めていく必要がある。教職課程専門委員会が連携の中心として位置づいていることは各学科等から報告があったとおりであるが、教職課程専門委員会から各学科等へという一方向で情報が伝達されるという傾向が強い。教職に関して各学科等からも情報や意見が寄せられ、教員養成を学内全体で盛り上げていくことが重要である。また、教職に関して非常勤講師との共有が十分でないとの報告が多かった。ある学科等から提案のあった非常勤講師を含む拡大研究室会議などは積極的に考えられてよい。

教職コアカリキュラムが提示されるなど、近年、教職に関する基準がより厳格に定められるようになった。前提となる学習指導要領やその解説についての把握が以前にもまして強く求められるようになった。この部分に課題を抱えていることが今回の作業でわかった。こうした課題を克服するための取り組みも今後期待したいところである。

今回の点検作業は全国私立大学教職課程協会で作成されたフォーマットを用いたが、二つ目の大項目「2. 学生の確保・育成・キャリア支援」と三つ目の大項目「3. 適切な教職課程カリキュラム」の記載内容の区別が難しく、報告書の作成者が混乱するようなどころもあった。点検項目の検討も次回の課題である。

美術や工芸を担当する教員の活躍が、美術・デザインという分野をめざす若者たちをつくりだす。すなわち、有能な教員の養成は、美術・デザインという分野の裾野を広げ、この分野の発展を促す。武蔵野美術大学出身の教員がこうした役割を担ってきたし、その役割をこれからも担っていくに違いない。本学での教員養成の堅持、発展のために、関係者全員が協力し積極的に取り組んでいくことを期待する。

教職課程自己点検評価作業委員会 委員長 大坪圭輔